次に大師が此土に入定留身して遠く龍華三會の曉を期し給ふはこれ下品の悉地なれば、一應は大師の定身の在します高野山は等流法身の淨土である。この大師の定體についても五十六億七千萬歳を期して此土に入定し給ふゆゑ、これ下品の悉地等流身の果なりと見る觀方と、下品の悉地は等流身の土なれども、この等流身の當體卽遍法界の毘盧遮那の果體なるが故に、大師入定の聖境そのまゝ法身法界宮なりと觀るものである。

しかして古來大師の一身に三品の悉地を悉く成就し給へると觀奉るのである。卽ち高祖大師の內證三昧地を論ずれば、已に金剛寶藏を開顯し、自心の大菩提を究竟して證悟し、心の佛國土を嚴淨して、法身大日如來の覺位を極め遍法界の密嚴國土に住し給ふのである。かの淸涼殿に於て、父母所生の肉身を轉ぜずして佛身を現じ給ふが如きは、これ上品の悉地卽ち法身大日の果德を成就し給へるを示されたるものにして、また都率天に住して彌勒菩薩に侍し給ふは中品悉地の相である、また此土に入定して遠く三會を期し給ふは下品の悉地の相である。かく大師の一身に三品の果德を成じ給うて、その果相を示現せられあるは、まことに不可思議と申さねばならぬ。彌勒菩薩の儀軌に、大日如來と彌勒菩薩と瑜伽行者の淨菩提心とは一體であることを說かれてありますが、大師はこの經旨を現證せられたもので、大日如來と彌勒菩薩と大師とは一體不二なりと觀らるゝのであります。

こゝになほ申したきことは、法身大日如來の色究竟天に高く法界の頂に見る超越的の觀方と、如來と感應の境法界至るところ、法身法界宮なりと觀る內在的觀方とあり、また都率天にしても、遠く天上に觀んとする觀方と、行者の淨菩提心これ都率天なりと觀る觀方とあり、また大師金剛定に入り、此土に住して、三會の下生を期し給ふは、これ等流身の分齊なり、しかも尅實してその內證三摩地を論ずれば、高祖已に金剛寶藏を開顯し、自心の本性を如實に覺悟し、法身大日如來の果位を成就し給ふが故に、五十六億七千萬歳と限られたる有相の果に卽して、不生不滅周遍法界の法身の果體を成せられたると觀る觀方とある。しかして三品の悉地宮凡て卽身成佛の體なりと說かれたるが如く、超越と內在、有相と無相並べ說くも寧ろ無相を本とせるものである。淨土をば高く法界の頂きに觀ると共に當處卽法界の內在の淨土を明かしその內在觀を表とするものである。こは佛敎は因果差別門と實相平等門を並べ明かし、因果門よりいへば佛界をば高く九界を超えたる處に觀るも、實相門よりいへば因果の當相卽實相法身にして、九界の當相に卽して法身の果體を成ずることを明かすものである。因果卽實相の妙門を開示するを大乘の要諦となすものである。

因果卽實相、娑婆卽寂光、生死卽涅槃の大乘の實義よりいへば一切衆生はこのまゝにして成佛せるものである、このまゝにして救はれて居るものである。しかも自心性の如實の開顯に三大無數劫を要し、このまゝにして救うてくだされある彌陀如來の本願を信ずる淨土門の敎にしても、淨土をば遠く

彼岸に求め未來の往生成佛を明かすが如きはこれなほ無明因分の說なり、娑婆卽寂光の大乘の究竟の眞意を開顯せざるものとなし、娑婆卽寂光の大乘の眞意を究竟して開示せんとし、高く生死因果の境を超えたる如來果上の境に住し、如來自證大覺の境より一切を見る果分爲本の敎へを說き、一切衆生は未だ曾て生死に輪廻せず、本來如來大覺の本際に住する佛子なり、菩薩子なり、金剛薩埵なる祕義を開說せられたるものは弘法大師であります。

かくの如く大師は一切衆生は本來法身如來の自證大覺の光明に照らされ果上の薩埵なる敎義を明かすと共に、自ら法身大覺の果體を現證して、卽身成佛し、此土に入定し、定力を以て一切を光被し、一切衆生をして果上の人たらしめ、此土卽淨土の義を究竟して現成し給ひしものである。

卽ち大師に依つて娑婆卽寂光の大乘の眞精神が現成せられたるものである。

しかして我等は如來大覺のうちに居ながら如來と隔り、淨土のうちに居ながら淨土を遙遠なる彼岸に欣求して止まないのは、周遍法界の法性を現證する如來自證の光明が、我等の心底に映ずるとき、之を自我を超えたる超越的存在として感ずるからである。

上に述べたやうに一切衆生の究竟の要求は、自心の本性を如實に知るにあり、しかも心性が自らを覺知せんとする必然性、卽ち菩提心の勢力にのみ依つて進修することゝせば所謂三大無數劫の長時間を要せずば、究竟大覺の境に至り得ないのである。しかるに已に自心性を如實に現證せる先覺者の佛陀を信じ、佛陀と一體となることを得ば三大無數劫を一念に超越して卽身成佛の大果を成ずるに至るのである。

されば我等は深く如來に歸命し、如來を念ずるとき、如來の光明に觸れその靈感を得るに至るのである、こゝに本來如來と共なるもの、本來如來の淨土のうちに住するものなりとの無相の果を得するに至るのである。救ひ給へと念ずるの極致、靈感に觸れるに至れば、本來救はれてあることを知られ、如來と共に佛國を嚴淨し、衆生成就の妙業を成ずるに至るのである。

しかして如來の實在を信ずるに至れば、淨土の實在も了解せらるべきである。如來の妙境界は能所住一體、依正無碍の境であるから、如來を信ずるは同時に淨土を欣求せるものである。

八　祈禱に就て

近時教界の一部に加持祈禱について、論議せらるゝことあるが、こゝに眞言密教の立場より加持祈禱について述べてみようと思ふ。世間往々加持祈禱は迷信なり、しかして佛教中、加持祈禱の本家は我が眞言密教なるよりして、眞言密教は迷信の淵叢のやうに云ふものあるも、こは密教の加持祈禱の正旨を解せざるものゝ妄語である。この意を明かにせんには、自ら密教の事相、教相の兩際に亙つて述べねばならぬが、加持祈禱は密教の事相にして、密教にはこの事相の外に教相がある、教相とは加持祈禱の可能の原理と、また低級なる信念をして淨化向上せしめ眞實の淨心に住せしむる道を明かすものである。この教相の方面よりいへば、密教は迷信の淵叢でなく、寧ろ世のあらゆる迷信を打破して、一切衆生に眞實の佛知見を開かしむるを、その教の使命とせるものといはねばならぬ。この教相の方面より語らずば、一般佛教にて否定せんとする加持祈禱を密教にて修することや、また、加持祈禱を解脱の要門とすることや、またあらゆる迷信を打破して、正信に住せしむる教意顯はれざるゆゑ、最初にこれに關する教相を要約して述ぶることにする。

密教の教相なるものを、その根本經典について見れば大日經に明す三句、三劫、六無畏、十地、十喩、五種の三昧道等の法門である。此等の教旨を詳しく述ぶることを略するも、これらの教相は何れも、分別の妄念を離れ自心の本性に住することを明かすものである。如來の眞身たる毘盧遮那法身の果體に契合する道を開示するものである。この教相の意よりいへば、心外に神を認めて、その神にある祈願をなす神人間隔の世の宗教の迷信邪教なるのみならず、曼荼羅の中の外部の諸神を信奉するときも、これら諸尊をたゞ心外實在の尊とのみ觀て、自身と本尊との兩つながらを忘れたる無相觀に住せずば、高き祕密の法門を修しながら、低級なる世間の宗教に同じ、天摩外道の徒に墮せるものである。大日經疏に曰く、

諸天八部五通の神仙なり、外現の曼荼羅の表示する所を以て例して知ぬべし。是の如く等の種々因緣、無數の方便、普門應現して群生を教化す。深淺同からず麁細異なり有りと雖ども、然れども其の實事を究むれば、秘密加持に非ざることなし、各々能く如來の淸淨の知見を開示す。若し是の如くの實相印を離んぬれば、餘は皆愛見の所生なり、天魔外道の輿に諸の營侶となる、豈に名けて淸淨句義と爲ることを得んや。

こは密教にて天上の諸尊卽ち deva をば、大日如來所現の尊として信奉することあるも、無相の菩提心に住せず、たゞ心外の天尊としてのみ信奉せば、迷信邪路に墮り、天魔外道の徒となることを勸誡し給ひしものである。

凡そ世間多くの宗教に明す神の靈感は、宗教的信念あるものの經驗せらるゝ事實である。而も我等

の分別の念の上に感ぜらるゝ神は、これ絶對眞身の影像である。かゝる影像の假神に囚らはれては、眞の絶對法身に契合し得ざるより、神人對立の分別の念の上に經驗する靈感をば妄念なり迷信なりとして、これを空ずる工夫を明かすものである。その他天上の諸尊以上に位せる、諸菩薩諸佛を本尊として信奉するとき、精神統一し深き三昧に住して念誦せば、種々の靈相の現することがある。かゝる靈感を得るとき感激してその靈相に執見を生ずるものであるが、その場合にも靈相に愛執せず寂然不動その信念を持續すべきを說く、かく本尊を念じつゝ、而も主客の相對を忘れ、無念にして念ずるところに、主客の分別を離れ、意識以前の眞の自心性に住せらるゝのである。衆生と佛との假相を絶せる、絶對の本地法身の果體に契證せらるゝのである。假神假佛を離れあらゆる靈なるものの本源たる眞神眞佛の體に契合せらるゝのである。卽ち煩惱、業に依て得たる生死の生を離れ、法身常住の眞性の生を得て如來と共に永劫眞實の生活に入るのである。かゝる境地に住するに至れば已に曼荼羅の聖位を得卽身成佛の果體を證せるものである。

上述の如く三句、三劫、六無畏、十喩、五種の三昧道等の密敎の、敎相なるものは、何れも前敍の敎意を宣暢せられたるものである。かの弘法大師の敎義として知られたる、十住心論や、寶鑰に開說し給ひし、十住心の法門は、大日經の三劫の敎旨に依て建立せられたるものなるが、此等の書を讀まんものは、密敎の敎義なるものは、如何に世の低級なる信念を純化、向上せしめ、淨心に住せしむるを本意とせるものなりやを知らるゝであらう。十住心の法門には種多の義趣存するも、衆生本有の靈性たる淨菩提心の開展の相を明かすを正意とすることは十住心論に明記せられたるところである。卽ち十住心の中、初め三ケの住心は神我を立つる世間の宗敎にして、第四より第九住心までは神我を否定する空無我の理趣を明かし、第十住心は無我空觀に依て一切の妄念消融せられたるところに顯はるゝ毘盧遮那佛の果境を說くものである。

その第四住心より第九住心までは、所謂一般佛敎の所明を盡すものなれば、こゝに概述し得ざるものあるも、空、無相、無願の三空三昧は初め第四住心の小乘佛敎より、顯敎の最上敎たる第九住心の華嚴宗に至るまで一貫せる敎義である。卽ち世間の一切は無常、空、無相にして何等願求すべきものなき理を說く。而してこの理趣を解せず、世間の差相に愛執するは生死輪廻の因なりとし、世間に對する願求は迷妄として破斥するものである。かゝる空、無相、無願三昧を本とせる一般佛敎の立場よりいへば、世間のあることがらの成就を、善神佛陀に祈ることの迷信なり、背理なりと云ふは、自然の歸結である。但し一般佛敎にも、俗諦差別の方面に、善惡因果の理を明し、十界の差相を說き、佛と衆生との感應加持、三寶の冥護を仰ぐことゝを示すものである。然しながらこは俗諦門の說であつて、その眞諦門よりいへば衆生と佛との假相を絶せる、一味法性の空理に契證するを究竟の敎旨となすものである。卽ち空、無相、無願の三空三昧に住することに依て、法性の空義に悟入し、無上大覺

を成ずる旨を明かすものである。されば仁王經や金光明最勝王經や大般若經等に經を書寫し、讀誦し受持することに依て世間の廣大なる利益を得せらるゝことを說くも、こは空義を證するを正宗とする經を流通する餘益を明かすものにして經の正宗よりいへば第二義的のものである。隨つてかゝる經典に一應現世の利益を祈願する說あるも、完全なる祈禱の法を說かざるは勿論、現世利益を祈願することに卽して、解脫の正路を明す祕義を開示せざるは自明の理である。

しかるに密敎は空、無相、無願の三空三昧に住するとき、あらゆる分別の妄執消融せらるゝところに、顯現する毘盧遮那常住の眞佛の境地を說くものである。卽ち如來果地の曼荼羅の世界を明かすものである。「金剛頂瑜伽略述三十七尊心要」に曰く、

空、無相、無願の解脫門に入るとは、所謂空とは一切の法皆空なり。空の體も亦空なれば、空も亦不可得也。無相とは(中略)一切の萬法體を擧げて皆空なり、一切の相空にして不可得なりと爲すを以てなり。無願とは凡そ所修の道は三界の希望の心を絶せり。願求する所あるは皆是れ有相なり。永く妄想を絶し、願求する所の心を斷つ。願もなく求もなき是れ眞の解脫なり。此の三相空なるに由るが故に、卽ち解脫の法門に入て、斯の正理を悟る。卽身に光明有て廓法界に周ねく、卽ち毘盧遮那の正體智に同ずるなり云々。

此の如く三空三昧に依て體得せる毘盧遮那成佛の大覺の體、これ祕密眞言乘の體である。又曰く

國師大三藏和上、含暉院承明殿大道場に於て頃ろ餘暇に因て梵經を披讀し、忻然として顏を熙はしめ、法樂虛適す。大悲の戶を開て諸の童朦を誘ひく、大に良緣を啓いて知見せしむ。我が秘敎は浩汗として涯り無く、法體幽微にして實に際を窮め難し、今且らく瑜伽の敎跡に依て、略々指南を爲し、眞言の行門爰に理趣を開く。今說く能觀は毘盧遮那佛報身是れなり所觀は四智の如來なり。(中略)能觀は是れ心所觀は是れ境なり八供養及び四大護菩薩等各々能所を具す。能所を具すと雖も、能所の體本と空なり。空有の理、本と無なれば、中道の心斯に契ふ。今こゝに金剛界三十七尊大曼荼羅及び賢劫の千佛、外金剛部の二十天及び四十天等を建立す。此れを初原として展轉して無量の曼荼羅を相生するなり。

こは曼荼羅の世界とは、所謂都絶能所の上の能所、卽ちあらゆる主客分別の細念を絶せる、眞妄未和合、法性法爾の世界にして、この境地には一切が無數の對立をなしながら、冥然として心王大日の大覺の體に歸し、而も各々その自性に住し、各々の三密門を顯現せるものなることを語るものである。

大日經疏に曰く、

心王の毘盧遮那自覺を成ず。爾の時に一切の心數卽ち金剛界の中に入て、如來內證の功德差別智印と成らずと云ふことなし云云。

この文はこれ心王の大日が大覺を成じ給ひしとき、心王所屬の無量の心數、心王と同じく大覺に住することを明かすものなるもその至理を深く究むれば、大日如來が大覺を成じ給ひしとき、一切衆生は皆大日如來の心數として悉く大日の大覺の體に連らなり、大日の大曼荼羅の系統のうちに住する金剛

子、菩薩子となれる祕義を明かすものである。卽ち

一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛とはこの境界を說けるものである。例へば月出でなば一切は一の光りのうちにあるが如く、心王大日の大覺の體よりいへば、一切は皆如來自證の光りに照らされ、大覺のうちに住するものである。この境界は如來の方面よりいへば如來自證の曼荼羅にして、衆生邊に約していへば心內本地の曼荼羅に住する位である。かくの如く大日大覺の境よりいへば、一切は悉く大覺の體に住し、成佛せる自覺體なるも、衆生の當相より見れば、依然として三毒の妄執に覆はれ、自心本地の靈覺の體に目醒めんとせないのである。月は隈なく照らせども窓を閉ざし、深き眠りに入れるものには、月光を見るによしないのである。かゝる衆生を救濟の爲めに大日如來の大覺の體より隨緣加持の無盡の諸佛諸菩薩を十方世界に示現しつゝあるのである。大毘盧遮那成佛の自證の體より、神變加持化他救濟の慈悲の妙相を法界に奮迅示現し給ひつゝあるのである。これを加持外現の曼荼羅とも云ふ。この曼荼羅の諸尊が、一切衆生の各々の機緣に應じて、利益を垂れ、衆生をして、本地自證の大曼荼羅に引誘し給ふのである。しかして衆生が此等諸尊の三昧を體得せんが爲めに、諸尊の三密門を修する。その實修の道を明かすものが所謂眞言密敎の事相である、阿字觀月輪觀等の觀法に依り、心性に悟入することを說くも、多くは曼荼羅の諸尊を本尊とし、本尊の三密門を修し無邊の功德を體得する道を明かす。而して三密加持の修行に依て得たる、ある感應の事實に卽し、その感應の事實を超越し、法性の眞際に住する妙門を示すものである。天台、華嚴等には一念の三千を觀じ、事々の無盡圓融の理觀に依て、法性を體得するを說くも、密敎は三密加持の行に依て感得したる悉地の果の因緣生無相不可得の觀をなしその當位より法身の大果に證入すべき道を明かすものである。卽ち加持祈禱の有相の悉地に卽して眞解脫の無相の大果を得すべき祕義を示すものである。慈親の片言隻語にも、與へられたる一片の事物にも、子たるものは慈親の眞情を汲み得るが如く、加持祈禱に依て得たる有相の悉地に卽して如來無限の大慈悲心を體する祕旨を明かすは、眞言密敎の加持祈禱である。心實相に住せば治世產業なほこれ佛道なり、況んや如來の靈力を體せんとする、加持祈禱豈に佛業ならざらんや。

前敍の如く曼荼羅の諸尊は、皆これ大日如來の大覺の體より十方世界に奮迅示現しつゝあるところの隨類の加持身である。

しかして此の諸尊の三昧を體得する、實修の要道を明かすものは密敎の事相なれば、諸尊の三密門無量なる如く、事相の法門また無盡である。而も修道の要諦は、本尊と行者と感應道交の域に入り、本尊法界身なるが故に我身本尊のうちにあり、我身また法界身なるが故に本尊我身のうちにあるを體し本尊と行者との相對差別の念を泯絕し、法身大覺の體に住し、如來の大自在力、大威神力の自身に

あるを體し、如來に代り如來の妙業を成ずるにあり。かの一座行法中に入我々入觀より字輪觀に入り、字門の不可得を觀じ能所の細念を絶し、如來眞性の生を體得せんとする修道の要旨を思へば、諸尊の三密門を修する事相門の正旨の存するところを知り得らるゝであらう。即ち諸尊の三昧を修する要諦は、感應加持の當位に卽してこの加持の當位を超越し法身の眞性を體得するにあり。

こはかの四種五種の法を修し有相の悉地に卽して無相の大悉地を成ずべきを明かすに鑑みても知り得らるべきである。諸尊の三昧門無量なるもこれを息災、增益、敬愛、調伏、鉤召等の四種または五種に分つことがある。此等の法を修し有相の悉地を求むる邊よりいへば、眞言密敎なるものは現世祈禱爲本の敎なりともいひ得られんも、上述の如く密敎は此等世間有相の悉地に卽して出世間無相の大悉地卽ち大日如來の常住の身心を體得する道を示すものである。世間の祈禱に卽して眞解脫の要路を開示するものである。四種五種法の有相無相內外淺深の義を要約していへば、息災の法門とは有相よりいへば、一切の災厄を除去することにして、無相よりいへば內の煩惱を除滅し、大菩提を成ずるをいひ、增益とは外には官位、福德、智惠等を增し、內には凡夫より菩薩、菩薩より佛果に至る道である。敬愛とは外には君臣、親子等の和合を得、內には佛陀と瑜伽一如の境に住する祕法である。調伏とは外には怨敵を對治し、內には四重八重等の罪障を斷するを云ふ。

かくの如く密敎は有相、無相、世間出世、內外、淺深の悉地を明かし世間有相の加持祈禱の法門に卽して無上眞實の解脫を得せらるゝ道を示すものである。卽ち世間有相の信仰より、萬機を引いて高き靈的生活に導くを敎の本旨とするものである。

信に依て行者と本尊との感應加持の境に入る道を明かすものは事相にして、眞智に依り加持の當位に卽して、その當位を超越し法性法身の體に契合し、自心の眞性に住する要門を示すものは敎相である。卽ち曼荼羅の諸尊の三密を修しその內證に契合する道たる事相と、三密加持の當相に卽して相對加持の當位を超越し絶對法身の果境を體得する祕義を明かす敎相との兩面より見れば密敎の敎旨の存するところを知り得らるべきである。弘法大師は兩部曼荼羅の諸尊を本尊とする眞言密敎を傳ふると共に、信念の向上歷程を詳說し、我身卽佛の大自覺を得、如來に代り衆生を成就し佛國を莊嚴する密敎の正旨を宣揚し給うた。かくいへば事相と敎相は別途の法門の如き感あるも、我等の淨心に佛日の影を宿とし、感應加持の境に入れば、如來の慈光に照らされて、自心佛を開顯するに至るのである。

大日經疏に曰く

阿闍梨の言はく、行者初め觀行を修して境界現前する時、內因外緣の力に依るが故に、自然に緣起の智生することあり、常途の習定の功力苦に至て、而して後ちに通徹するに同ぜざる也云云。

これ一般佛敎は、たゞ行者自心の觀念力のみにして佛の加持力を缺くが故に、甚だ勞し、大なる觀念力によらざれば自心の實相を證見し得ざるも、密敎は如來加持力に依るが故に無明の妄執消融し、佛

智自ら現前することを明かすものである。卽ち事相の極致に至れば自ら敎相の眞意を體せらるべきを說けるものである。如來大覺の體と衆生の本性とは、その自體に於て同體一如なるが故に、我等淨心に住し、至心に念誦せば、彼も來らず我も往かざれども、法爾瑜伽の故に自ら靈感が現ずるのである。一度この靈感に觸れんか、己れを空うして如來に歸するに至るのである。眞に分別の妄念を離れ己れを捨てゝ如來に歸すれば煩惱業に依て得たる生死の生を離れ、如來常住の眞性の生を得するに至るのである。如來と共に永遠眞實の生活に入るのである。こゝに至深の要求滿たされ、無限の歡喜があるのである。所謂獨立無依己に足つて外に竢つなき大樂妙適の眞の無願三昧に住せらるゝのである。こゝに至て祈禱の眞の目的は達せられたるものと云ふべきである。されば祈禱とはその外相より見ればある有限のことがらを神佛に祈るものゝやうなるも、その內面の眞の要求は有限のことがらに卽して、絕對無限の眞の自心の生命を求めんとするものである。卽ち祈りの聲を深くたづぬれば自心はこれ絕對の覺體なりとの本然の叫びの聲なりともいはるゝのである。

上述の如き密敎の敎旨を知らざるものは、密敎にて修する加持祈禱を低級なる世の宗敎の祈禱と同じく觀んとするものあるもこは密敎の深意を知らざるものゝ言である。凡そ祈禱は迷信なりと云ふに種々の立場あるやうなるも、大途左の四種に歸するか。

一、佛敎の正旨は世間の解脫にあり、然るに祈禱は世間のある願望の成就を、佛陀、善神に祈願するものにして佛敎本來の敎旨に背くが故に。

二、佛敎徒は三寶以外の者に歸依すべからず、しかるに祈禱の本尊として天神を崇拜することあるが故に。

三、祈禱は無效なるが故に。

四、宗敎の理想は無限にあり、しかるに祈禱は有限のあるものを願求するが故に。

今此等の疑難に對し、一應の解をなさんに、

一、佛敎は世間の現相を迷妄なりとしその解脫厭離を說くものである。しかるに世間のある願望を佛陀善神に祈願するは、佛敎本來の敎旨に背くものにしてこれ佛敎の立場よりいへば迷信なりといふことを一應いひ得らる。しかも前叙の如く一般佛敎はこの世間の愛執を斷ち解脫を成せしめんとして、空、無相、無願三空三昧に住するを明かすも密敎はこの三空三昧の極致に體顯せられし、毘盧遮那法身の自證成佛の體の法界に遍在せること、及びこの如來の自覺自證の體より、十方世界に隨類の化身を示現し各々の衆生の所願に應じ、その有相の悉地に卽して、如來無限の慈光を體得せしむる玄旨を開說することを知らば、一般佛敎にて否定せんとする加持祈禱を、密敎にて却つて之を修する深意を解せらるゝであらう。また一般佛敎にてはこの世間は迷妄なり、一切衆生は三界に輪廻する迷子なり

と云ふも、密敎にては大日如來の大覺の體は一切處に遍じ、一切衆生はこの大日如來の大覺の體に連らなり、大日如來と同じく大菩提の體に住せる自覺體なり佛子なり、菩薩子なりと云ふ祕義を明かす。而して三毒の爲めに本有覺體覆障せられあるも、何らかの機會にその自性の光りを發せんとするものである。平生無信仰の者も、一朝非常事に際會し、神、佛に祈りをなすものあるは、これ自性の菩提心に目醒めんとする、一種の作用なりと觀らるゝ。卽ち祈禱は自らの菩提に目醒めんとする中心の叫びである。

二、密敎にて曼荼羅の中の諸佛諸菩薩諸天神を、本尊として祈願することあり、而も天神を本尊とすることあるも、これ外道の神を崇拜するにあらず、曼荼羅會中の諸尊は皆これ大日如來にあらざるはなし疏に曰く

金剛手とは卽ち是れ大日如來なり、觀世音とは亦是れ大日如來なり、文殊師利とは亦是れ大日如來なり、乃至鬼神八部一一に亦此義あり、亦卽ち是れ大日如來と成る、體は是れ一なりと雖へども、義各々異なり云云。

されば天神を本尊とすることありといへども迷信なりと云ふべからず、前叙の如く迷信正信はもとこれ信ずる人の心の淨不淨にあり、分別の妄執を以て念せば、假令、毘盧遮那法身を本尊とすとも、而二の隔執たる根本無明を斷じ得ないのである。

三、加持祈禱を修すとも、靈驗なきが故に祈禱は迷信なりとは往々聞くところなるが、祈禱の靈驗の有無と云ふが如きことは、輙すく語ることがらではないが、修すも靈驗が現ぜないから迷信と云ふことが出來ない、天台智者大師の法華玄義の感應妙の釋に、感應につき四種の不同あることを述べらる。卽ち

一、冥機冥應
二、冥機顯應
三、顯機顯應
四、顯機冥應

今暫らく此の四句の釋を借て、感應の顯不顯を解せば、現に祈禱して靈驗の顯ずるは第三の顯機顯應、祈願をなすも現に靈益顯現せず、將來その功德の顯ずるは第四の顯機冥應、第一の冥機冥應と第二の冥機顯應とは過去の善根の顯はるゝ場合についての釋である。今日の人は、第三の顯機顯應の立場のみよりして解せんとするゆゑ、加持祈禱を修するも靈驗なきゆゑ迷信なり等と唱し、大なる邪見を生ずるに至るのである。修して現益なき場合も、第四の顯機冥應のあることを思はねばならぬ。元來祈禱の靈驗の現不現と云ふが如きことは、我等の容易に語るべきことがらでない、却つて業煩惱の厚薄、修する人の身器の淨不淨、心地の純不純、行の熟不熟、久不久、支具の備不備等深省すべき種多のことがらがある。何れにしても佛陀の實在を信じ、しかも至心に祈願するも靈感なきゆゑ祈禱は迷

信なりと云ふが如きことはいひ得らるべきことではない。冥々のうちに感應のあるは疑ふべからざる事實である。

しかしながら悉地の現前と云ふことは、一朝一夕に能くせらるべきことではない、されば經には一念一時の修行に依て、如來の三昧を體得せらるべきを示すと共に、幾年の久しきに亘つて修行して、漸く悉地の成せらるべきを說く、興敎大師末代眞言行者の用心を示して曰く、

何なる心を發する者、必ず悉地を成就する、謂く深信ある者能く悉地を得、何なるを深信と云ふ、謂く久々に修行して法驗を得ずといへども疑慮を生せず退心を生せざるなり、此の如くの人必定して悉地を成就す云云。

眞に法驗の有無をも忘れ、久修練行する底の人にして、初めて大悉地を成ぜらるべきである。されば僅かに修して、靈驗の顯不顯を云ふべきでない。

四、宗敎の理想は無限なり、しかるに祈禱の目的は有限なり、故に祈禱は迷信なりと云ふ人あるが、こは上にもいひし如く、たゞ世間有相の悉地の爲めに祈禱をなし、それのみに止まれば祈禱は迷信ならんも、密敎の祈禱は前叙の如く有相の悉地に卽して無相の果を體得するを理想とするものである。卽ちある特殊の感應の事實に卽して如來無限の靈力を體する道なるを知らば、密敎の加持祈禱は世の宗敎の祈禱と自ら旨趣異なるものあるを知り得らるゝであらう。

迷信の意義一樣ならざるも、密敎よりいへば、未だ生佛不二の心に住するを得ず分別の念の離れざる妄信、所謂而二の隔執を帶びたる信念を云ふ。神人の隔間を明かし、神をたゞ超越的にのみ見んとする、世の宗敎や、或は淨土を遙遠なる他界に求めんとするが如きは、二偏二見を帶びたる迷信なりと云ふべきである。

興敎大師は

現世後世を分別すべからず常住にして生界佛界は一如平等なりと觀ずべし

といへり。以て知るべし、眞言密敎は未だ迷信の域を脫せざる世の宗敎と同視すべきものにあらずして、あらゆる迷信を打破し、衆生をして佛智見を開示せしむるを以て敎の正旨となすものなることを。

（昭和三年一月）

九　虛空藏菩薩の三摩地

我が大師信者は大師に歸命し、その無限の靈力に攝取せらるべきである。大師は諸尊の三摩地を體得し給ふが故に、大師に歸命することに依て諸尊の三摩地を成就せらるゝのである。大師は諸尊の三摩地を體得し給ふうち、最初に成就し給ひしは虛空藏菩薩の三摩地であつた。さうして最後身に入定留身ましまして、南方寶部の三摩地に住し給ひ、金剛微細定より、無限の靈力を十方に現じ、信あるものに感應し給ふこと、恰も明月の淨水に映するが如くである。今虛空藏菩薩の三摩地の一端を語り、以て大師の無限の靈德の鑽仰の一助としようと思ふのである。

人も知る如く大師は入佛道の最初に、大安寺の勤操大德より虛空藏求聞持の祕法を授かり、この法を修して虛空藏菩薩の三摩地を體得せられたのである。この求聞持法は本邦の道慈律師が入唐中に印度の善無畏三藏より傳へて歸朝せられ、(道慈律師は善無畏三藏の來唐に先つこと約十五年前に入唐し養老二年に歸朝せり)善議大德に傳へ、善議大德より勤操大德へ傳へられ、勤操大德より我が大師に傳へしものであるが、この法は密敎が日本へ傳はつた最初とも云ふべきものである。大師は阿波の太龍寺や土佐の室戸の崎等人烟絕えたる靜寂たる淨境に於て、この法を修し悉地を成じ給ひしことは、かの三敎指歸や御遺告の文に明かである。三敎指歸に曰く

爰に一りの沙門あり、余に虛空藏聞持の法を呈めす。其の經に說かく、若し人、法に依て此の眞言一百萬返を誦すれは、卽ち一切の敎法の文義諳記することを得、焉に大聖の誠言を信じて、飛燄の鑽燧に望む。阿國大瀧の嶽に躋り攀ぢ、土州室戸の崎に勤念す。谷響を惜まず、明星來影す。云云

御遺告に曰く

生年十五に及で入京し、初て石淵の贈僧正大師に逢て大虛空藏等幷に能滿虛空藏の法呂を受け、心に入て念持す。(中略)名山絕嶮の處、嵯峨孤岸の原、遠然として獨り向ひ淹留苦行す。或は阿波の大瀧の嶽に上て修行し、或は土佐の室生門の崎に於て寂暫す。心觀すれは明星口に入り、虛空藏の光明照し來て菩薩の威を顯はし、佛法の無二を現ず、厥の苦節は、則ち嚴冬の深雪には藤衣を被て、精進の道を顯はし、炎夏の極熱には穀漿を斷絕して、朝暮に懺悔すること二十の年に及べり。云云

虛空藏菩薩は兩界の曼荼羅の何れにも存す。卽ち胎藏曼荼羅には虛空藏院の主尊にして、同じく釋迦院には釋尊の右に住し給ふ。また金剛界曼荼羅の四波羅中の寶波羅蜜はこの菩薩にして、南方寶生如來の四親近の寶菩薩は虛空藏菩薩と同體である。また金剛界曼荼羅の賢劫の十六尊の中にも虛空藏菩薩が存せられるのである。その他瑜祇經には五大虛空藏の三摩地が說かれてある。かくの如く虛空藏菩薩は兩部の曼荼羅の何れにも住し給ふのである。

曼荼羅の諸尊は何れも普門大日の尊體より示現せる、自性所成の聖者にして、齊しく一切衆生を大日如來の自性の淨土に引攝し給ふ尊なれば、固より淺深勝劣なかるべきも、薄草子傳受聞書と云ふ祕密の大事を記せる書のうちに、虛空藏菩薩の內證本誓の殊に甚深なることを示されてある。祕密の大事口訣はかゝる誌上に顯露に語るべきものにあらざれども、本書の讀者は何れも敬虔なる信念を有せらるゝことを豫想し、またその大事口訣も一般に示して可なるべき程度に意譯し、その一端を明かすであらう。

釋迦如來は一代の化緣盡き涅槃に歸入せられ、たゞ舍利を留め給うたのである。如來の眞身を親しく拜むことの出來ない滅後の遺弟は、遺身の舍利に對し如來の眞身を瞻仰するが如く、尊重恭敬の誠を致すのである。涅槃經に如來、入涅槃の後に塔を建て舍利を供養すれば、無量の功德を成就することを明かされてあるが、眞言密敎にては遺身の舍利をば、南方寶部の三昧耶形たる如意寶珠として尊信するのである。舍利を寶珠として尊信すると云ふことを、かの五轉の實義についていへば、北方の涅槃が南方修行位に轉換せることを示すのである。眞言密敎には凡夫が發心修行して、大覺の果體を成就する、從因至果の始覺上轉の次第、及び己成の如來大覺の果體より、無盡の三密門を示現して衆生を攝取し給ふ從果向因の本覺下轉の義を明すに發心、修行、證菩提、入涅槃、方便爲究竟の五轉の法門を以て示し、更にこの五轉を東南西北中の五方に配し、發心は東方、修行は南方、證菩提は西方、入涅槃は北方、方便爲究竟を中央として明かすのである。（東因發心の次第に依る）今これら五轉の釋等は凡て略するも、たゞ一言すべきは寂靜無爲の涅槃をば靜寂陰森なる北方に配し、進取息まざる萬行をば、陽氣熾んなる南方に配するのであるが、眞言密敎にては、五轉中の修行位たる南方をば、寶部の三摩地とする。この寶部の主尊は寶生如來であつて、之に寶光幢咲の四菩薩の眷屬がある。虛空藏菩薩は、その四菩薩の內の寶菩薩にして、所謂四親近中の第一、寶部中の寶部、行中の行の德を主とる尊である。靜的北方の涅槃を表示する舍利を、動的南方の修行を表する、如意寶珠として尊信するところに、眞言密敎の眞意が顯はれてゐるのである。さうして入涅槃の後、更に南方の修行位に轉ずといへば、これ發心し修行し、果德圓滿の涅槃に歸したる後、また因位の行位に轉歸するが如く思惟せらるれども、これ果後再び因位の行に歸へるにはあらず。この行はこれ因位自利の行にあらずして、大慈悲化他の大行である。佛心とは大慈悲である。究竟涅槃の果體とは大慈悲の行である。諸經論に多く涅槃は寂滅なり、空なり、無相なり等と消極的に說くことあるも、こは未だ涅槃の眞境を體得せざる凡人よりいへば、涅槃は凡人の一切の分別智を離れたる境なるが故に寂滅なり、空なり等と否定の釋あるなり。而も涅槃の體は虛無なるにあらず、この涅槃界の積極的旨趣を明かすものは眞言密敎である。卽ち胎藏曼荼羅にては北方涅槃を天鼓雷音佛と稱す。これ天雷の相なくして而も空に滿つる音を發するが如く、涅槃は寂滅無相なれども、永遠不盡の如來大慈悲の妙行の存するもの

なる事を示すものである。また金剛界曼荼羅にては北方涅槃界を特に羯磨部（作業）と稱し、そのうちの主尊を不空成就佛といひ、その眷屬をば業護牙拳といひ何れも、如來の大慈悲化他の妙行を表せるものである。卽ち涅槃とは、空寂の體にあらずして、自覺自證の大菩提より、法界に滿つる大慈悲の妙行を現じつゝある無限の靈活體である。されば先きに眞言密敎にては、北方涅槃を表示する舍利を、南方行位を表示する如意寶珠として尊信すといひしは、これ涅槃界とは空寂の體にあらずして、無限の靈動體なることを明かすものである。卽ち東方にて發心すると云ふは如來無限の眞身を信じ、如來の身に契合することにして、また如實に自心の本性を體得せる位である。こゝに主客思惟の分別の妄念を離れ、主客一如、理智一體、色心不二、福智不二、大智大悲不二圓滿の大菩提が顯現するのである。

この法性自爾の純粹靈動の體をば南方の行位と云ふのである、されば涅槃界とは自覺と靈動と大慈悲の三法が一如相卽せる具體の境と知るべきである。卽ち涅槃界にては知卽行にして、その行は法界に應同する大慈悲の行である。かの三句五轉とはこの義を明かすものである。南方行位の如意寶珠とは所謂淨菩提心如意寶珠の意にして、靈活無碍の菩提心體を云ふのである。さうして虛空藏菩薩とはこの淨菩提心如意寶珠を內證本誓となすものである。虛空藏とは大空三昧を以て庫藏となし、福智の珍寶を納め、一切衆生に施與するの義である。卽ち左記の虛空藏經等の文を讀まば、その本誓の存するところを知り得らるゝであらう。

若し此の敎法に依つて修行すれば業報等の障、皆悉く消除して、福德增長し、心神適悅して大乘を淨信し有情を利樂し、心に退轉なく、世間出世間所有の財寶悉く皆獲得せしむ等の義を說かれ。

又

若人あつて我呪を持する者、三世諸佛の所に深く結緣す。若し無上菩提を得んと欲し、三業菩提を得んと欲し、現身に仙人と爲り、十方の佛土に往來することを得んと欲するもの皆この呪を持せよ。若し智惠を得んと欲するもの（中略）此の呪を持し、亦我が名を稱念せよ。

又曰く

虛空藏菩薩の名を聞く者、命已に終るに臨んで、唯微識有つて身心覺らざらんに、菩薩來到して知識の形を以て敎へて發心せしむ。云々

人もし此菩薩の三摩地門を法の如く修んと欲ふものは、眞言の阿闍梨につき、念誦の次第を授らねばならぬが、今菩薩の眞言を示せば

南牟阿迦捨揭婆耶唵。唵阿利。迦摩利。慕利。莎縛訶。

大師は入佛道の最初に、虛空藏菩薩の三摩地を體得せられ、最後身に於て南方寶部の三摩地に住し、入定留身ましまして、平等の身心を法界に遍じ、有緣の衆生を利益し給ひつゝあるのである。凡て靈

界のことは我等の分別智を絶せる境地なれば、無念無想たゞ信修すべきのみである、日夕相親しむ日月星辰の如き、これ分別智を以て知り得らるゝものがらなるも、これを學的に知らんとせば、專門の學者もこれを知悉すること容易ならざるも、而も我等は戸外に出でゝ仰いで日月に對せんか、瞬間にその光に觸れ得らるゝのである。如來の大慈は分別念を離れ、信修する者のみその慈光に攝取せられるのである。

十　支那に於ける密教の復興に就て

佛教聯合會主催の支那佛教視察團の一行に加り、大正十五年十月一日京都を發し、汽車にて馬關に直行し、關釜聯絡船にて朝鮮に上陸、京城、奉天、北京、天津、南京、鎭江、蘇州、上海、寧波、普陀山、阿育王、天童、杭州、方面を旅行し、十月三十一日上海を發し長崎へ寄港し、十一月二日神戸へ歸着す。此間の觀察の一斑を左の順序に依り叙せんとす。所說多端なれども、要は如何にして支那の佛教を復活せしめ、活社會の眞宗教たらしめ得べきか、如何にして中華國民を宗教的に救濟し、眞自覺を得せしめらるべきやにつき所見の一端を記すにあり。

眞言密教の遺跡

眞言密教が初めて印度より支那へ傳はりしは、西晉の懷帝永嘉六年（西暦三一二）西域の僧、尸梨蜜多羅（Śrīmitra）が建康に來り、大灌頂經、大孔雀王神咒經等を譯し、よく咒術を行ひ靈驗を示現し、密教の一法を修したるにあり、爾來東晉乃至唐宋等の間に西來の三藏及び支那より印度に行きし、求法家の密教を傳へたるものゝ事跡を尋ぬれば、甚だ多くして枚擧に堪へざるも、今は日本の眞言密教にて教祖として尊崇する、金剛智、不空、善無畏、一行、惠果、弘法、卽ち唐の玄宗、肅宗、代宗、

德宗の時代に密敎を宣揚せし祖師の遺跡、ことに弘法大師が入唐し、長安にて惠果和尙より密敎を傳へたる道場の靑龍寺の事等、聊か語るに止めん。

日本の眞言密敎の徒は、弘法大師の入唐受法の道場たる長安の靑龍寺及び長安、洛陽にある列祖の遺跡については深き景慕の念を有す。されば支那に行かば長安に抵り、祖師の遺跡を訪はんとは余の年來の宿望なりしも、今度の行は團體旅行なれば、獨自の自由行動出來ざると、かつ西安方面は目下の狀態にては旅行困難なるを聞き、西安行は諦め居たるも、十月七日の夜、北京の法源寺にて講演の際、言たま〳〵長安の靑龍寺の事に及ぶや、これを聞き居たる陝西安康の曾志遠なる人、講演後、余を問はれ長安靑龍寺のことを語らる。氏の說によれば西安に靑龍寺なる寺二つあり、一は城東南二里許の祭台村にあり、現時改名して石佛寺と稱するもの、これ弘法大師が惠果和尙より眞言密敎を傳受せられし道場にして、一は城東南九十支里の地にあり、密敎の佛像を祀り、密敎の寺として現存す。この靑龍寺は隋の初めの建設にかゝり、古き歷史を有し靑龍寺と稱せしことありしより推せば、長安城內の靑龍寺と何にか關係ありしならんとて現存せる同寺の佛像の寫眞五枚と同寺の由來書の如きものを示さる。

余は西安に行かざる爲め、彼地のことを語るべき資格なきも、弘法大師受法の道場たる靑龍寺の遺跡を明確にし、その祖跡を保存せられんことを希望する餘り、尙この事につき一言せんとす。近年我宗の人々にして西安靑龍寺の遺蹟を訪ふ者往々存するが、何れもかの城東南二里許の祭台村にある石佛寺を古靑龍寺として參拜し來るものゝ如し。然るに昨年八月發行の『宗敎研究』なる雜誌に常盤大定氏靑龍寺に關する調査を發表せられたるものを見るに、祭台村の石佛寺を靑龍寺なりと云ふは、これ淸の嘉慶年間に編せられたる咸寧縣志に依るものなり、而も咸寧縣志の說は杜撰にして信ずるに足らず、近く彼地に二年間滯在して、實地を仔細に調査せし、早崎梗吉氏の發見せられたる靑龍寺の遺跡こそ長安の舊圖にある靑龍寺の地點に符合すとのことなり。

されば現今の石佛寺が靑龍寺の遺跡なりや、又早崎氏の發見せられたるものが靑龍寺の眞跡なりや、又長安の靑龍寺と曾志遠氏の言ふ西安城外九十支里の地にある靑龍寺とは、何か關係ありしものなりやとのことを調査の後、眞の靑龍寺の遺跡が、明確になれば、その地に記念碑か或は佛堂を建て祖德を景仰したきものなり。

弘法大師在唐中、師の惠果和上入寂せらるゝや、同門の遺弟を代表して、惠果和上の碑文を撰し、そを建てられたることは性靈集第二卷にある

大唐神都靑龍寺故三朝國師灌頂阿闍梨惠果和尙之碑　日本國學法弟子苾芻空海撰文幷書

なる文に依て知らる。この古碑を發見するを得ば、實に千古の精神を今日に喚起する徵象となるものなれば、如何なる方法に依てか發見したきものなるが、若し發見し得ざれば、新たに大師の撰にかゝ

る碑文を刻せし碑を造り青龍寺の遺跡に樹てたきものなり。

その他金剛智三藏來唐の節、住せられしと云ふ長安の薦福寺、不空三藏の住せられしと云ふ長安の大興善寺等今なほ存するも、金剛智三藏と關係ある長安の資聖寺、同三藏入寂の地たる洛陽の廣福寺の遺跡、又同三藏を埋葬せしと云ふ龍門の墳墓の地、尙不空三藏と關係ありし鴻臚寺、淨影寺、西明寺等の遺跡、又善無畏三藏長安に住せられし時、求聞持法を譯出せられたりと云ふ菩提院及び興福寺、その他大日經を譯せられしと云ふ、洛陽の大福光寺の遺跡、一行禪師を埋葬せる銅人之原の遺蹟等は何等かの方法に依て、發見したきものなり。ともかく支那に於ける眞言列祖の遺跡は西安洛陽の間にあるものなるが、此等の祖蹟を調査し、發見して何等かの方法に依て保存したきは末徒の至情なり義務なり。なほこの旅行中卽ち十月十三日南京に行き、明の故宮の遺址にある古物陳列所を參觀せしとき、密敎を初めて支那へ傳へたる尸黎蜜多羅の古碑を同館の階下に置かれたるを見たり。余これを見て團體を離れ數日南京に滯留して、その碑のありし地點や又尸黎蜜多羅の住せし建初寺の古蹟等も尋ねたかりしも、こは別の方法に依りて知り得らるゝことゝ思ひ（近時役地より密敎修得の爲め高野山へ留學し居りし人々等に依囑し）懷古の情を湛へて歸り來りしなり。其他杭州西湖の四大寺の隨一たる靈隱寺（雲林寺）は弘法大師彼地通過の時滯留せられし遺跡なりと、今なほ彼地に口碑として傳へ居ることを、曾て中田覺船氏より聞きしことあり、また蘇州領事館の吉田氏よりも杭州に弘法大師の遺跡あれば彼地へ行かばそを尋ねよとのことを聞きしゆゑ、十月二十九日杭州へ行きしとき、靈隱寺へ參詣せしも、詳細に尋ぬる餘暇なく、たゞ追懷の情を留めて辭去せしなり。

又寧波は弘法大師歸朝の當時の發船の地（唐代の明州）なれば、口碑にても傳へられある遺跡なきかと思ひ、普陀山、阿育王、天童山へ行きし時寧波を通りし故、彼地の白衣寺、觀宗寺に詣で、物知りと思はるゝ人々に尋ぬるところありしも、何等聞くことを得ざりしなり。なほ弘法大師入唐當時着船の地たる福州の長溪縣や、上陸の地點等は明かにし置きたきものなり。

支那佛敎の現狀

支那佛敎の現狀については、今日まで已に調査發表せられたるものあれば、今こゝに絮說するの要なかるべきも、密敎を如何なる立場よりして、支那へ宣布すべきかの所見を叙するに便せん爲め、支那佛敎の現狀について一言せんとす。

支那佛敎はその宗派より言へば、法相、天台、華嚴、淨土、禪等あるべきも、余の見たるところには、形より云へば殆ど禪宗にして、精神より言へば淨土門なりとも言ひ得べきものなり。卽ち平易に言へば南無阿彌陀佛の名號にて、支那佛敎は統一せられあるとも云ひ得らるべき歟。此の如く禪と念佛これ支那佛敎の全體の如くなりしについては、種多の因緣存すべけれども、近因を云へば、淸朝

の雍正帝が自ら禪を修せしも、而も萬衆は禪にて解脫し得易からざるを知り、禪と共に念佛門を流布せしめたるに因るものなりとも云ふ。されば禪門の根本道場といはるゝ大寺にても、禪堂と共に念佛堂あり、禪と念佛とを双修せるが、こは禪宗のみならず、天台、法相、華嚴等の諸宗も皆齊しく淨土門念佛門を兼修するものゝ如し。

而して此等の佛敎は何れも、淸末まで萎靡沈滯振はざりものなれども近年何れも復興の氣運に向ひつゝあり、その內特に佛敎學として隆んに研究せらるゝやうになりしは、唯識宗にして、又唐代に隆盛を極めしも、明代に至り殆んど廢滅の狀態にありし、眞言密敎が、輓近種々の因緣により再び復興の氣運に向ひつゝあるは、敎界の爲め慶すべきなり。

支那に於ける密敎の現狀

上述の如く西晉の代に尸黎蜜多羅初めて密敎を印度より支那へ傳へし爾來唐の初運まで幾多の人々に依て密敎の經卷が飜譯せられ、また祕密の法門を修せしものありしも、此等は所謂雜部の密敎たりしなり。而して密敎の根本聖典たる大日經、金剛頂經が飜譯せられ、密敎の光輝燦然として中外に耀きしは唐の玄宗、肅宗、代宗、德宗の代、金剛智、不空、善無畏、一行、惠果等の大阿闍梨耶あり、密敎の正意を發揮せし時代なり。惠果滅後四十一年卽ち武宗帝の會昌五年（西曆八四五）に破佛の暴擧あり、殊に密敎はその打擊甚しく、佛殿、經卷殆んど灰燼に委せられたり。惠果滅後五十七年目に入唐せられし眞如親王は

佛寺の大なるは日本の大安寺に如かず、名師を訪ふに日本の空海上人に及ぶものなし。

と嘆息せられたるより觀るも、當時の狀勢を推知するに難からず、宋朝に法賢、施護三藏等あり、多少密經を譯出せしも雜部の密敎にして、純部の密敎に非ず、思ふに武宗の破佛以來密敎の大阿闍梨出ず、有相の悉地に卽して無相の大菩提心を得する敎の正意傳へられず、爲めに淺近なる世間の邪敎に同するに至り、遂に明代に至り邪敎と共に禁止せらるゝに至りし乎。卽ち晩唐以後は密敎の眞精神傳はらず、多少その形骸の存したるものありしならんも、後にはその形骸も見るべからざるに至りし歟。近年支那の內地を旅行せし人より、處々の寺院にて密敎の佛像と思はるゝものを見しことあるを聞き、或は滿劦山龍泉寺に大日如來の像あり、或はかの長安城外九十支里の地にある靑龍寺に密敎の佛像を存すと云ひ、又長安の臥龍寺や、南京の毘盧寺等にて、阿彌陀佛、文珠、普賢の種子曼荼羅を信者に授與することあり、或は準胝陀羅尼、大悲咒、施餓鬼法等の祕密に屬する法の存するより見れば、密敎の一法唐代より絕えず相續せしならんかとも思はれざるにはあらざれども、恐らくこれは喇嘛敎の種類にして、眞正の密敎はその形骸も精神も共に支那に絕え居たる乎。

然るに今より二十年以前に楊仁山居士が、眞正の日本の密敎を支那へ傳へんとして、桂伯華氏を日

本へ留學せしめ、故浦上和尚について密教を修得せしめたることあり、其頃支那より日本へ來りし、留學生の間にも密教を修得せんとの風潮ありしものか、前教育總長王九齡氏の如きは、日本留學中、横濱の東福寺にて故浦上和尚について十八道を修せしことあり、又我より彼に行いて密教の一尊法を傳へしものには佐伯覺隨師等あり、偶々廣東の王弘願氏權田雷斧師の著にかゝる『密教綱要』を飜譯し流通せしより、密教の聲、支那佛徒の間に遍く、つひに密教を求めて遠く日本に留學するものあり、大正十二年頃より余の許へ來り密教を修得せしものゝみにても、廣東潮安縣開元寺の僧純密、武昌の太虛法師の弟子太勇、武昌洪山寶通寺僧密林、寧波觀宗寺僧顯蔭、その間廣東の妙光等の諸法師の來山求法あり、此等は歸國の後、各々大法の宣布に努力しつゝあるなり。而して王弘願氏は廣東にて『佛化』なる雜誌を發行して密教を宣傳するあり、太勇法師も歸國後、武昌佛學院にて多數の僧侶に密教を傳へ、密林法師は武昌の寶通寺に湖北省督軍蕭耀南氏等有力なる信者の後援に依り、堂々たる密教の大伽藍を建設するあり、顯蔭法師は高野山留學中より、雜誌『居士林』『海潮音』等に據り密教思潮を鼓吹し、其他漢陽、南京、上海、廣州、杭劵、北京等に密教研究所設けられ、密教の教風漸く彼土に及ばんとするの氣運醞釀せられしも、支那密教の中心人物たるべしと囑望し居りし、顯蔭法師は病死し、太勇法師は遠く西藏に入らんとして、今や支那の中部を離れ、密林法師はそが根據たる武昌が戰亂の巷と化し、純密法師は遠く廣東に在り、近時中央の地にて活潑なる活動を缺くの嫌ひなきにあらざれども、やがて一般の要求に驅られ、中心人物出現し大法復興の時期到來することあるべきを信ず。卽ち現今はなほ支那密教復興の準備期なれば、日本の密教徒たるものこれが指導誘掖に最善の努力を致さゞるべからず。

日本の眞言密教を支那へ傳ふるについての所見

密教を支那へ宣布するに當り、第一考察せざるべからざるは、彼地の教界に密教を宣布する必要あるや否や、また宣布するとせば密教には機根に應じ淺深重々の法門あり、その何れの法門を傳ふべきかは省察せざるべからざる重要なる問題なり。

余の觀察を以てすれば、現在支那の佛教をして復活せしめ、活社會の眞宗教たらしめんには、たゞ深く密教の本義に依るより外に道なかるべし。今その一二の要點を擧げて辨ぜんに、前敍の如く支那の佛教は大體よりいへば禪と念佛なり。卽ち一寺にて禪堂を有すると共に念佛堂を有し、一人にて西方淨土の阿彌陀佛を念じつゝ自心佛を體得せんとして參禪しつゝあるなり、他方の淨土を求めつゝ自心の淨土に住せんとしつゝあるなり。所謂道の兩端を踏みて未だ中道に至らざるの觀あり、卽ちその形より見るも不統一混雜の狀態にあり、その教義信仰より言ふも、道の兩際に墮し、未だ中道の眞實義を體せざるの觀あり、この禪と念佛、主觀教と客觀教とを統一したる深き大なる立場に更に進み入

らんとせば、これ自ら眞言密敎に歸するより外に道なきなり。

即ち密敎は曼荼羅の佛を本尊とし、その本尊を信じ、六識または八識にて應身報身の佛を見る道を明かす。而もその六識八識即ち我等の分別識にて見る佛は、我等衆生の妄執妄薫の上に現ぜし佛なれば、これなほ妄薫を受けし佛にして絶對の眞身に非ずして、その分別識にて見る佛をば更に無相空觀に依て拂却し、無執無念にして佛を念じ、應報二身の假相に執せず、分別の細念を離れ、阿字の大空位に入り、絶對の眞身たる法身大日如來の果體に契證する道を示す。即ち自身は遍法界の眞身たる法身大日如來と不二一體の靈體なる眞自覺を體得し、此身此土に大慈悲の佛業を成じ、この土に佛國を建設する祕義を示す。されば修行門の要は不信而信、不到而到、即ち信に依て佛を念じつゝ無相觀に依てその信を淨化し、つひに分別の意識を破つて、絶對法身に冥合するにあり。密敎徒の修する一座の行法についていへば、入我々入觀に依て生佛感應の祕觀に入り、更に字輪觀に入り、生佛の二相即ち本尊と行者との二つながらを忘れ、其の絶對無碍遮那法身の果境に住し、如來の本誓三昧耶を己が本誓とし、衆生界に出でゝ佛業を成ずる道を明かす。

この密敎の立場より見れば淨土門はたゞ信に依て假佛を見んとするもの、禪門はたゞ無相無執の空三昧に住することを敎ゆるものなり。これ共に道の半面を說くものにして、無執にして念じ、不信にして信じつひに法身遮那に契證しこの身に法身遮那の心印を體得する道を明かさざるものなり。これ道の二邊に墮しつゝある支那の佛敎をして、敎理的に信仰的に救ひ出し、眞に眞生命を得せしめ、更生せしむる道は密敎に依る外なしと云ふ所以なり。即ち禪門はこれ應身の釋迦如來を本尊とし、淨土門はこれ報身の阿彌陀佛を本尊とするものなるが、この應報二身はつひに一大法身に到達せずば、究竟せる敎たらざるなり。而もこの密敎の見地よりせば、禪と淨土の行者はこれ共に祕密莊嚴心に向つて歩みつゝあるものにして、一轉すれば共に祕密莊嚴心に歸入するものなり。汝等の所行是れ菩薩道なり。禪門の行者は深く心性を究明し、不生の生を得、無我の大我を得し、念佛門の行者は報身の阿彌陀佛を念じつゝ報身彌陀の眞身たる法身の阿彌陀に歸するに至れば、共に密敎を修しつゝあるものと云ふべきなり。

また支那の佛敎が實社會と沒交涉にして、超世間的の敎として、活社會に生ける宗敎とならざるは、戰亂相つゞき人をして自ら世相を厭ひ一身を全うせんとする念を生ぜしめ、つひに世相は無常なり、幻化なり、無價値なりと達觀する禪的敎義や、或は淨土を未來に期する淨土門に歸するに至り、佛敎をして社會と沒交涉の宗敎たらしむるに至りしならんも、しかも彼の敎義信仰が自ら厭世超俗の傾きあるによる。即ち淨土門は現世は罪惡深重の苦界なりとし、たゞ未來の淨土を欣求すべきを敎へ、禪門は世間の一切を幻化なり虛無なりと達觀し去り寂靜法性に住するを說き、何れも世間を離れ超脫自らを淸うする遮情消極の方面に偏する敎にして、無我のうちに如來常住の生命を得、如來の本

誓三昧を己が本誓とし、此土に於て度生救濟の大本願の實現を說く、積極の敎へが缺如せるより、世間と沒交涉の宗敎と化したるにあらざるか。何れにしても支那の佛敎を更生せしめ中華人士をして宗敎的自覺を得せしめ、價値ある生活をなさしめんには、實に東方の光たる眞言密敎に依らざるべからず。

支那佛敎は上述の如く卽心卽佛を明す禪門と未來往生を期する淨土門の外に、觀音、地藏等の諸尊に歸命し、現世の福利を祈願する現世利益の信仰あり、而て密敎にもまた此の現世有相の利益を得る法門あり、否密敎の事相の多くは現世有相の利益を得る法門なりとも云ひ得らる。卽ち息災、增益、敬愛、調伏、延命等四種五種の法門を修し現世に特種の靈を得る祕法を明かす。而もこの法門には有相無相双び備はり、世間淺近の加持祈禱の敎へとは天壤の差ある事を知らざるべからず。卽ち特種の靈感を得るとき其の靈感に感激し、己れを空うして本尊に歸し、感應道交の極、本尊と自心との差相を離れ一如法身に融會し自心に佛德を體得する道を明かす。卽ち特種の靈感に卽して普遍の大靈に融合して、生活全體を靈化するの道を示す。

支那人の密敎を求めんとするものを見るに、寧ろ密敎によつて現世の靈益を得んとするもの多きが如し。曰く唐代密敎の隆盛なりし時代には、國運隆昌にして文化燦然四夷を光被するものありたり。今、日本國を見るに皇統連綿として國運隆昌なるは、これ鎭護國家の祕法を修する密敎あるによるなりと觀、現世の利益を密敎を修して得んとするもの多きが如し。されば衆生の所願に依て、世間有相の悉地を得せらるゝ法門たる祕密の事相を彼土へ傳へ、以て有相の悉地に卽して無相の悉地を得、特種の靈感に卽して、生活全體を靈化する法門の要諦を顯揚して、彼土の低級なる加持祈禱の世間敎を淨化し、一般の信念を向上せしむるは、これ又密敎の一使命なり。

先きに支那の佛道修行者の念佛と禪の淨業は、これ祕密莊嚴心へ進む豫備行を修しつゝあるものにして、これ等の行者は何れも密敎相應の機根なるべしといひしが如く、この有相の悉地を成ずる方面より云ふも、支那の道俗の人士は正に密敎を修するに堪へたる機根なりと云ふ事を得べし。そは佛道に入れるものゝ生活狀態を見るに、持戒淸淨にして、道念堅固、二十年三十年の禪堂の修行に堪へなほ倦まざるが如く、或は閉關數年一室の禪床に冥想靜修をなすものもあるを見るが、彼土の佛道修行者の實行力の勝れたるには驚嘆すべきものあるなり。なほ密敎の淨土觀等について語らざるべからざるものあるも今は省略すべし。

次に日本の眞言密敎を如何にして彼土へ流布すべきかの、實際問題について數言せんに、その方法は大要左の三途に歸するか。

一、密敎の經典、特に敎相に關する書を彼地へ流布すること。

二、將來密敎の大阿闍梨耶たるに堪へると思はるゝ人物を撰定して、留學せしめ、その留學生に秘密敎の道肝を傳

ふること。

三、日本の密教徒自ら彼土へ渡り、大法を宣布する事。

以上別に説明を要せざるも、一言附加せんに、日本の密教は支那の唐代に流布せし正しき密教を弘法大師が傳來し、以て今日に相承せるものなり。而して此の密教は支那六朝時代より唐代に亘り、幾多の高僧に依て建設せられ、開顯せられたる、大乘佛教と同一根柢に立つものにして、自ら西藏所傳の喇嘛教等と理趣異なるものあり。されば先づ密教の教相に關する書を流布し、密教とは如何なるものなりやの了解を與ふること緊要なるべし。

第二項は別に説明の要なかるべし。第三項についての所見を略述すれば、我より進んで彼土へ渡り、密教を宣布することは、最も理想的方法なるも、而も支那の民衆に對し、直接布教し得ざる狀態にある現在にては、先づ學德備はれる大阿闍梨耶を、北京、南京、上海等の地に住せしめ、彼土の密教渴仰の者に傳布するは、尤も捷徑にして、またその功果大なるべき乎。

禪思餘錄

一　弘法大師と高野山

涅槃地と虎邱山と高野山

小衲は大正十五年の秋支那の南北を旅行したことがあつた。さうして弘法大師が御歸朝の時遙かに本朝の方に向ひ密敎相應の地をトせんとして雲中高く投げ給うた三鈷が遂に高野山に飛來したりと傳ふる明州（寧波）や日本の僧慧鍔が觀世音菩薩の靈像を奉安せしより觀世音の靈場として有名なる普陀山や、榮西禪師や道元禪師等の參禪受法の道場たりし阿育王寺や天童山其他名山大川に遊び古賢の遺跡を訪うた時、何れも懷古の情に禁へず低回去るに忍びざるものがあつた。そのうち最も深い感銘を得たのは蘇州の虎邱山に在る沙門道生の涅槃經を講じたる遺跡に存せる點頭石を見たときであつた。余は其時思うた。印度、支那、日本に佛敎の靈場なるものが實に無數であるが、その中にも釋迦牟尼如來入滅の靈蹟たる印度のクシナガラの涅槃地と支那の虎邱山と、日本の高野山とはよく三國に於ける佛敎の敎義信仰等を表現せる尊き靈場であると。

佛敎の要諦

佛敎の要諦を此處に說き盡すことを得ざるも、要約していへば己を空うして如來に歸命し、如來の聖胎のうちに我等の菩提心を托し佛子として再生し如來と共に佛業を成ずるにある。

さうして印度の涅槃地は釋迦牟尼如來の身心を空滅に歸せられた聖跡なれば、己を空しうし迷へる生死の生命を空滅に歸せしむるはこれ涅槃なり、解脫なる敎意を表現せるものである。卽ち我等は法身大我の眞身と一致し如來常住

の生を得んには、一度は己れを空うし迷へる小我の生命を空滅に歸せしむるを要す。この身心を空滅に歸せしめ己れを空うする入道の要門を表せるものは如來入滅の涅槃地である。

即ち至道を得るには己れを空うし小我に死する消極的一面と小我に死すると共に如來大我の眞心に一致し、如來常住の生を得、如來の御子として再生する積極の方面とがある。さうして己を空うして如來に歸命せば如何なる重罪即ち一闡提の衆生までも皆成佛し得らるとの尊き如來の御教への教旨を如實に語るものは支那の虎邱山にして、如來大我の眞身と一致し、如來眞實の生を得、如來の御子として再生し、如來の妙業を成する佛教の究竟の教意を如實に顯示せられつゝあるものは實に入定留身し如來無凝の靈用を常恒に示現せる弘法大師入定留身の靈域たる我が高野山である。

虎邱山上道生の體驗

應身としての釋迦牟尼如來はその化身を二千年前印度のクシナガラの涅槃地に滅し給ひしも、釋迦如來の眞身たる法身如來は三世常恒に在しまして、一切世界に遍在し一切の衆生の迷へる魂に呼びかけ、警覺加持の靈用を冥々のうちに與へ給へつゝある。而して一切衆生も亦等しく本來成佛し得る靈性を有するが故に、如來の眞身に歸命すれば罪重き一闡提の者までも皆成佛せらるといふ尊き御佛の教旨を體驗せるものは虎邱山上に於ける道生であつた。

道生の傳に依れば、道生は幼より慧解衆に勝れ、十五歲にして講座に登り經を講ぜしに辭辯暢達、宿老の學徒といへども敢て酬抗するものなかりしと云ふ。道生は法顯三藏の譯せられたる六卷の涅槃經を讀み一闡提（佛法を信ぜず佛性なき重罪の人）の者は佛性無れば隨つて成佛し得ざることを說かれある文を觀て、却て經文に反對の意味、即ち一闡提の者も佛性あれば、また必ず成佛し得べき義趣を唱導した。蓋し道生は深く經の本旨を洞見して、文相に現れざる祕旨を闡明したのである。こゝに於て多くの學徒は道生の說を以て經の本旨に相違する邪說なりとして非難の聲甚だ高く、遂に道生は多くの大衆より排斥せらたのである。こゝに道生は大衆の中に於て容を正うして誓つて曰く、若し我が所說が經の本旨に相違すれば、我れ現身に癘疾を表すべし、しかも若し我が說くところ如來の本懷に契ひ、經の正旨に相違せずば願くは捨壽の日師子座に據らんと、それより道生は大衆と別かれて吳の虎邱山に入り、石を集めて聽徒となし、涅槃經を講じ、一闡提の者も佛性ある理趣を述べ、我が所說の如きは佛心に契ふや否やと、その所信を談ずるとき群石皆首肯した。その首肯せる石を點頭石と稱し傳へて今日に及んでゐる。道生の最初讀みし六卷の涅槃經は、涅槃經の全譯ではなかつた。後、曇無識三藏によつて四十卷の大涅槃經が譯せられた。其れには、明かに一闡提の者も佛性あり、隨つて成佛せらるべき理趣を說かれてあつた。茲に於て最初道生の說が邪義なるべしと非難せる大衆も、道生の卓識に驚き、道生もまた己が所見の佛心に契ひたりしを喜んだと云ふことである。

蓋し四十卷の涅槃經には、生身の釋迦牟尼如來はクシナガラの涅槃地にその化身を滅し給ひしも、如來の眞身たる法身は生もなく滅もなく常に現前に在します秘旨を明かすと共に一切衆生にも皆如來と同じく常住の佛性を具する所謂一切衆生悉有佛性の深義を說かれたるものである。一切衆生に佛性あれば一闡提の者にも佛性あり、既に佛性あるが故に深く如來に歸命せば竟に成佛せらるべきことを開說せられあるのである。慧解の深き道生はかゝる理趣を說かれたる四十卷の涅槃經を未だ讀まずして、六卷の涅槃經を見て已に涅槃經の正旨に通徹したのである。

クシナガラの涅槃地に於て釋迦牟尼如來は、その化身を滅し給ひ、また如來の所說のうちに涅槃とは身心都滅即ち

一個人格の永劫に空滅に歸せる境地であるかの如く示されあるより、涅槃とは迷へる身心の空滅に歸せるものなりと解する者もある、西洋の佛教學者の中にはかゝる所見を有するものあれど、之れ所謂小乘佛教の說にして如來の本懷を開顯せる大乘の說ではない。大乘にては生身の釋迦牟尼如來はクシナガラの涅槃地に滅し給ひしも、その如來の眞身たる法身如來は時空を超越して一切處に遍在し、自證の光明を以て一切衆生の心靈に神變加持の妙用を與へ、その眠れる佛性を覺醒せしめ、自心本有の佛性に目覺めしむる秘旨を說くものである。

此の大乘佛教の教旨は支那の六朝時代に佛教の教旨に通徹せる高僧續出してその甚深の教旨開顯せられたるものなるが、右に述べたる虎邱山の如きは道生が大乘の眞精神を體驗せる尊き靈地である。

眞言密教の正意

弘法大師の所見によれば、多くの佛教は迷へる小我の生命を空滅に歸せしむるこれ涅槃なり、または百川の流れの海に入つて同一の鹹味となるが如く、衆生の個體として平等普遍の如來の眞身に歸一せしむる教旨を明かすも衆生各々の個體が如來常住の生を得、佛子として各々が再生せる眞實の佛境界を開說せるものはない。たゞ此の境界を開顯せるものは眞言密教なりと觀給うた。即ち眞言密教にて我等は如來に歸命し、各々が如來常住の生を得、佛子として再生し佛業を成する秘旨を開示せるものである。大師はかゝる教旨を開說せられたるのみならず、自らかゝる教旨を體得せられ給うた。

即ち入定留身して十方世界に靈動無礙の妙用を示視されあるは、これ如來の眞身たる法身常住の生を得、法身と共に三世常恒に一切世界に遍して衆生化益の佛業を成せられてゐるのである。如來のうちに自心本來の佛性に目覺めたる如來大覺の實相を如實に示現せられあるのである。

弘法大師の教

大師の教へに依れば、一切衆生は皆本來佛性を有し、その佛性即ち自心本有の眞實の魂に目覺むると云ふ事が最高至深の要求にして、宇宙の一切は各々が自心に目覺んとする道程にあるものである。即ち大師は十住心論に道德も無ければ宗教心もなく無知蒙昧にしてたゞ物欲を滿たすことのみに耽り醉生夢生の生活をなせるものも、いつかは自心本然の必然性にうながされ眞實の魂に目覺むる相を述べられてある。即ちたゞ物欲を滿たすことのみに耽り居るものも、その情欲の滿足をつゞくる結果飽食等が健康を害することを知り、却つて節食することが健康を持する所以なることに氣づきしばしば節食することに依つて身心の安樂を得らるゝより、つひに己れに節せしものを父母等に施し更に他人に施し、他人のうちにも高德の人格者に供養せんとするに至り、遂に道德的生活に入り、更に自心の外に神佛の存在を求め之を信ぜんとする宗教心を生するに至る。さうして神佛を信ずる宗教心も次第に向上して神佛を客觀に求めし者が更に神佛は自心のうちに存することを知る主觀教に進み、つひに主客統一の絕對の本佛に歸し、この本佛のうちに自心本有の佛性、眞實の自心に目覺むる眞我の自覺、所謂菩提心轉昇の相を委說せられてある。

大師の靈用

一切の衆生の至高至深の根本の要求は、眞實の自心の魂に目覺むるにありとせば、廣い世界長い時間の間には如實に自心の本性に目覺めた大覺者の在しますことが知らるゝのである。この自心本性に目覺めたる大覺者はこれ三世の諸佛である。即ち我等はこのまゝにして居ても何時かは自心の魂の根本の欲求即ち自心の必然性にうながされて自心

の本性に目覺め、自心の本性を如實に體得し、自心本性の功德を如實に開顯する如來大覺の境界に達し得らるべきである。而しながら自心の魂の必然性にのみ依り、自心の本性に目覺むることにせば、所謂三大無數劫卽ち無限の時間を要する。我等には自らの魂がその本性に目覺めんとする必然性があると共に先覺者たる三世の諸佛は我等は知らざれども、冥々のうちに無限の靈用を一切世界に遍じ我等の魂に呼びかけ、我等の魂の本性に目覺めしめんとの警覺加持の靈用を與へ給ひつゝある。我等はこの如來の呼びかけの聲に目覺め、一念如來に歸命する信念を起し、如來と感應加持の靈境に入るに到れば、三大無數劫の長時間の修行を一念に飛躍し、必ず現身に於て如來大覺の靈體と一體となり、如來の德を我等の身に體得する事ができる。弘法大師は此の敎を現證し卽身に法身如來の大果を成し給ひ如來の靈用を十方世界に示現し一切衆生を化益し給ひつゝあるのである。

高野山は法性の淨土

國王の御威德はその領土の一切に普ねく及ぶも、而も王の在しますところを帝都と稱し衆人招かざれども王風を仰いで帝都に到るが如く、大師の靈光は法身大日如來の妙體と共に法界に遍するも、入定留身の靈地たる高野山は生ける法身如來の淨土として千年來天下萬衆に仰信せらるゝは深き所以の存するものがある。人は自ら本有の佛性に目覺めんとする至深の要求あると共に、その靈性を如實に現證せる如來を見んとする欲求あるは法然自爾の至性である。かく如來を見んとの至深の要求あるも生ける如來を見るを得ざるより釋迦牟尼如來の遺跡を拜してその至情を慰さんとし、千里を遠とせず身命を捨てゝ佛跡の參拜に赴けるもの古來幾許人なりしやを知らない。かの四座講式等を讀まんものは、如何に古來佛徒の佛跡にあこがれしかの一端を知るであらう。

しかも印度に至り佛跡を拜するも、空しく千古の遺風を追懷するのみにて、なほ見佛の至深の要求を滿たし得ざるより、現に淨土に在します如來を見んとの熾盛の道念の生ずるに到るはこれまた必至の勢である。現に西方に在します阿彌陀佛を見んとして捨身往生をなせし善導大師の徒の如きはよく此の意を表するものである。

佛を見んとの深き信念の要求より何千里を遠とせずして印度の佛跡に詣づるも、如來は幾千年前クシナ城外涅槃の雲に隱れ給ひ空しく聖跡を留むるのみにして、生ける聖容を見んとの根本要求を滿たし得ざるより、現在淨土に在します如來を見んとするも未來往生の後にあらずは見佛の益に與り得ない。卽ち應身の釋迦牟尼如來は二千年前涅槃の雲に隱れ給ひ、報身の佛陀は現に西方淨土に在しますも、十萬億土を隔て未來往生せずば親しく見るを得ないとすれば我等は見佛の至情を何づくに於て滿たすべきであらうか。

佛法印度に起て何千年、爾來法雨に浴し究竟の解脫を成ぜしもの幾千億萬なるかを知らざれども如來究竟の眞身たる法身の妙果を現身に成就し、如來の妙相を此土に現成せるはたゞ之れ高祖弘法大師のみである。さればその入定留身の地たる高野山は生ける法身如來の淨土である。

常在靈鷲山の釋迦牟尼如來出世の本懷を開顯せる法界宮である。古來高野山を法身の淨土たる自性會場なりとの相傳の說、まことに深意の存するものがある。大師入定し給ひしより眞摯なる求佛の徒、此の靈峰に登り大師の靈光を仰がんとするものあるに到りしは大師の金剛定の薰力に依るものならんも親しく生ける如來の聖容を見んことを望んで止まざる人性の至情に出づるものである。明昭和九年は大師此の峰に入定し給ひしより一千一百年の聖忌に相當ると共に、衆聖點記等の說に依れば明年は釋迦牟尼如來降誕より二千五百年の聖辰に相當するのである。我等は生れて

かゝる聖辰に値遇することは不思議の因緣と云はねばならぬ。されば釋迦牟尼如來の出世の本懐を此土に現成し、三世の諸佛の佛德を一身に具現せる生ける如來の在します此の靈峰に詣でゝ大師の靈光を仰ぎ、人生至奥の靈性に目覺められんことを望むものである。

（昭和八年十一月）

二　眞然大德と高野山

弘法大師は、令法久住、鎭護國家、佛道成就の爲めに、幾多の伽藍を設け、寺塔を建て給うた。しかも高雄山、室生山、東寺等は已に開基せられありしものを、復興し完成せられたるものなるも、高野山は弘仁七年朝廷より廣大なる地を賜り御入定まで殆んど二十年に亘り、修禪の道場として自ら入定の境として、諸伽藍の造立をなし給ひしものなれば、これが將來の護持につき、細心の御留意ありしことは、御遺告等の文に依ても知り得らるゝのである。

御遺告のうち眞然大德への御遺告、諸弟子への御遺告は多く高野山に關するものにして、二十五ケ條の御遺告は一宗の宗要、特に東寺に繫ること多く示されたるものなるも、その第十五條に毎年正月御修法奉修の修僧は、その施物の幾分を高野山の修理費に充つべきことを示され、或は第十六條には、眞言密敎傳持の人の養成をば東寺に於てせんとし、毎年三人試度すべき、年分度者の官符をば東寺へ賜りしも、かくては高野山の人法荒廢すべき恐れあれば、改め奏して高野山に於て試度すべきことを遺命せられたるに依り、東寺長者實慧大德、遺旨を體し奏請し、同年八月二十日勅許の官符を賜り、高野山に於て試度せらるるに至りし等より觀るも、如何に高野山の護持に留念せられたるやの一端を窺はるるものがある。隨つて將來高野山の大伽藍を完成し修禪の客この峯に集り、高野山開創の精神を具現せしめんには、諸弟子のうち誰がその適任なるやについては、深甚の考慮あらせられたることを推知せらるるのである。しかして大師の甥にして九歲の時より大師の室に入られ、敎養深く、道念堅く、恭順至孝にして春秋に富める眞然大德に高野山を御遺囑になつたのである。

眞然大德は大師に隨ひ、神泉苑の雨請に列し、その法力靈顯を見て、信修精進、悉地を成せずは止まざるとの勇猛心を發し、益々練行せられ後、眞雅僧正より兩部の灌頂を受け、經軌を學習し深く奥旨に達せりと云ふ。大師御入定前、諸弟子に遺告し給ふと共に、眞然大德に

高野山の創造未だ全からず、須らく志を勵して營構し、鎭護の靈區、眞言の敎場と爲せ、また實慧大德に眞然を助けて、その業を全うせしむべきことを顧命せらる。

かくて大師入定し給ふや、諸弟子と共に、慇懃に龕葬の事を行はる。

承和三年五月、眞濟僧正と共に入唐せんことを奏聞し、その聽許を得、七月太宰府を發船せるが、難風に遇ひ、柁折れ船壞れ、同行者にして溺死するもの多く、入唐の志を果さず、中途にして歸還した。その入唐せんことを請はる上奏文、及び實慧等の諸師、眞然眞濟に托して、青龍寺の同法侶に寄する書を見るに、入唐の念願は求法にあるも、また大師の行迹を訪ね、併せて大師の終焉を惠果和上の廟前、青龍寺の同法侶に報じ、道誼を盡さんとの至情に因るものなるを知らるるのである。當時の入唐は布帆に乘じ、萬疊の雲路を凌ぐものにして、もとより身命を賭しての、殉敎的冒險事であつた。かかる難行を敢然として果さんとせられたる眞然大德等の風格、眞に景仰に禁へないものがある。

眞然大德は、高野山務を領すること五十六年の久しきに及び、よく大師付屬の精神を遵守し、高野山の信仰を中外に顯揚し、大師の遺德を發揮せられたる偉績まことに大なるものがあつたが、その一二を記し遺德を讃揚しようと思ふ。

眞然大德は、元慶七年陽成天皇の勅問に對し、高野山は諸佛所住の淨土なることを答へ奉れるが、これ大師より相傳の南山八葉の大事等實修せられ、南山はこれ大日の淨土なることを體せられたる心境を語れるものなるべし。隨つて大師在世中に未だ完成せざりし大塔を修理し、完備せしめたるも、或は九丈の寶塔即ち西塔の建立、其他瑜祇塔の造立、眞言堂、准胝堂、鐘樓、經藏、食堂、彌勒堂等を建立せられたるは、皆これ佛國を成就し、淨土の莊嚴をなす淨信に基く梵行なりしを思ふべきである。なほ大德在世中に實慧大德は奥院、御影堂、中門等を建立せられ、山容佛閣自ら淨土の相を呈するに至つた。大德滅後、十年にして、宇多法皇高野山へ行幸あらせられたるより觀るも、當時已に高野山に對する信仰が、如何に上下に傳へられたるやを知るべきである。これもとより大師の遺德のしからしむるところなるも、また大德が南山を法性の淨土と信じ、堂宇の莊嚴等に盡されたるに因るものである。後代、高野山の信仰が宇内に弘まり、萬衆が參詣するに至れる基因を作せるものなりともいひ得らるべきである。

大德は、法皇の行幸を仰ぐまでに、伽藍の完成、寺門の整備に盡瘁せられしと共に、觀行怠らず、道譽益々たかければ、その德風を慕ひ來りて、授法を請ふものあり、或は諸宗の高僧と共に、宮中に於ける宗義の論場に列し、或は長者となり東寺を管すること七年、その教化を當代に敷けるのみならず、法益遠く千歲に及ぶものがある。即ち天安元年唯識の學匠たる元興寺の增利來りて嗣法を求め、兩部の灌頂を受く、元慶三年、聖寶尊師醍醐山より來りて兩部の大法を受け、翌年再び來り參侍し、一夏九旬精練怠らず、大德より秘密の奥底をつくして授傳せらる。大師より眞然へ傳へられたる南山の大事は、無空律師に至て附法絶えたるや否やのことを記することを略するも、大師より眞然へ傳へられたる南山の大事は、元慶四年に眞然より聖寶へ傳へられたるについては、文獻の在するものがある。かくして聖寶、觀賢、淳祐、元昊、仁海、成尊と相承し來りしものを、明筭大德これを相傳し、以て南山の大事として中院流に相傳へ、今日の末徒なほその法益に浴することを得らるるものは、一に大德の道行德風、よく聖寶尊師をして歸向せしめ、來山受法せしめたるに因るものである。高野山には、小島流、常喜院流、西院流、持明院流、安祥寺流、三寶院流、勸流等相傳へられたるも、殊に中院流を以て南山の根本法流となす所以は、中院流には大師眞然等と相傳せる南山の大事を傳へたるに依るものである。

また元慶七年十月、宮中仁壽殿に於て、各宗の名僧二十七人に宗義を論議せしめられたるとき、大德その場に參せられ、元慶八年には、一の長者に補せられ、寛平元年八月仁和寺落慶供養には勅に依て導師を爲す。

また前述の如く、大師の遺命に依り、三業度人の官符を賜りたるに依り、學徒教養の制度を設けられ、修學會、練行會を開き、經論講學の方式を制定せられた。承和十三年四月、實慧大德、高野山金堂に於て、大日經疏を講ぜられたることありしが、學會を制定せられたる等に依るもの乎。しかるに後、二十年程經て、高野山は道遠く往復艱難なるより、試業の阿闍梨多く疲倦を生ずとのゆゑを以て、遂に東寺に於て試度することとなつた。その結果高野山は、寂寞として住侶絶えなんとするに至りければ、大德憂慮せられ、元慶六年五月十四日、奏して試度をして舊儀に復せしめんことを請はれ、高野山に賜りたる年分度者の廢罷は、先皇の勅命に違し、亦先師の宿願に乖くこと等具陳し、

懇請せられたるに依り、舊に復せらるることを得た。しかるに年分度者の制も幾多の變更あり、三十帖策子のこと等より、山家の人法衰頽に歸せしが、祈親、明筭等の諸師に次で覺鑁上人來山せられ、大に經論講學の精神を復興せられ、後、法性、道範、長覺、宥快等の諸師續出せられ、教學を興隆し、末徒の教養の地として、永く今日に及べるもの、その淵源を尋ぬれば、大師の遺命を遵奉し、堅守せる大德の信念に基因せるものともいひ得らるべきである。

かくて大德は、大師の遺囑を受けてより、殆んど五十餘年に亘り、一山を統理し、眞俗二諦の興隆をなし、なほ門徒に師跡を守り、佛法を興さしむべきことを告げ、山務を壽長に委し、寛平三年九月十一日寂せらる。大德の墓所は、現今金剛峯寺の境内に存するが、雨を大德の廟墓に祈りて、靈驗ありしといひ、覺鑁上人の時、影現して密教を興隆し、東寺一門を隆昌ならしむべきことを告げられたると傳ふ。大德の心靈永く一山を護り、一宗を護念せられつつあるのである。かく山を護り一宗を護念せらるるはこれ鎭護國家、利益人天、この教の法益をして無窮ならしめんとの願念に基くものである。

今回眞然大德一千五十年遠忌法要に際し、長くも傳燈國師の諡號を宣下さられたことは誠に恐懼感激に堪へざる次第で、大德も地下にて凞怡微笑されてゐることと存ずる。

三　高野山大學の使命

拙衲の現在希ふところは、無累の地に居て、觀佛久修、道行三昧に住したいのと、多年に亘りて調べた宗義について、更に一段の研鑽を加へたいと云ふことである。

衲、二十二歳の年、本學の前身たる古義大學林へ入學して以來、今日に至る四十八年の久しきに亘り、本學に學ばして貰うて居ることより、本學が發展し、進歩し、完成され、有爲の人材が育成されることを衷心より念願し、希望し、またそのことに努力をさゝぐる點では、他人に讓らない心構へではあるが、學長となつて本學を統理し行く器でないことは、誰よりもよく自覺して居るつもりである。ことに振古未曾有の重大なる時局に際し、國家の大理想を實現せしむる道は、御稜威を仰ぎ一億一心、君國の爲めに盡す赤誠と、その忠誠が神明佛陀に通ずるにより、自然に享受せらるゝ天佑とに依るにあるは言ふまでもなきことであるが、天壤無窮の國體をば、金剛不壞の如來の定力を以て、守護し奉らんとは、弘法大師の鎭護國家觀にして、かゝる教旨を奉する我が宗團としては、いよ〳〵宗教報國に邁進せねばならぬと共に、その最高學府たる本學は、その使命いよ〳〵重且大を加へ來れるのである。

また現下、宗派の合同が企圖せられ、教育機關の改變刷新が論議せられあるのであるが、かゝる重大時機に、本學統理の任に當るものは餘程の手腕力量を要することは、明かであるは言ふまでもなきことである。衲の如きは、その器にあらざるを自覺しつゝも、この重大機を傍觀し得ざるものあり、もし學校に精神あらば、必ずやその無情を訴ふるであらうことを思はれ、推擧せらるゝまゝに、その重任を負うて立ち、微力を盡す決意をなしたのである。ついては佛陀神明に本學の發展を祈願すると共に、宗門全體より、本學に對する理解ある同情と、絶對の援助を得て、本學をしていよ〳〵その基礎を鞏固ならしめ、本學樹立の精神に副うて、眞言密教の教旨を現代に發揚し、興亞の指導原理として、又人類永遠の眞實救濟の宗教としての道の大本を明かにせんがため能所化一體となつて、研鑽と實修とに精勵し、有爲の人材の育成に邁進せんことを念願して居る次第である。

本學は開校五十有餘年、大學令に依る大學として昇格してより十五年と申しては居るが、實は本學の淵源甚だ遠く、その設立の旨趣又極めて深いものがあるのである。即ち大師二十五ヶ條の御遺告の中の第十六條に、末代の弟子は、高野山に於て教養すべきものなりとあるはそれである。その大師の御遺志を奉體し、弟子の實恵大德、この旨を朝廷へ奏問し、三業度人の官符を高野山に賜るを得た。こゝに於て眞然大德、かたじけなき聖旨をかしこみ奉り、大師の御遺志を體し、子弟教養の學制を設け實施せられたのが實に本學の濫觴である。しかして實恵、眞然、祈親、明等、興教大師乃至覺海、法性、道範、尙祚、眞辨、信日、信堅、玄海、長覺、宥快等の幾多の先德が、殉教的精神を以て傳統の教學を傳へ、高野山に於て殆んど一千年の久しきに亙り本宗の末徒を教養し來つたのであるが、この歷史的事實と、その事實のうちに流れる偉大なる精神とが、本學の生命にして、本學をして今日あらしめたるものである。しかして末徒が高野山に上りて修養し、冥々のうちに大師の靈德に化せられ、上求菩提の宗教的實感體驗を得たるのち、世間に出で、下化衆生の教化を布きしことが、實に本宗をして、千年の久しきに亙り、生々たる發展をとげしめし所以である。

智度論に出家の修道は、聚落よりも、深山遠谷の地ならざるべからざることを明かし佛教に於ける凡ての軌則は、佛陀を準的となすべきをのべてある。しかして釋迦牟尼如來は、王城に於て得度せずして、尼連禪河の畔、菩提樹下に於て正覺を成じ給うたのであるから、末代の佛弟子はこれを軌範とすべきことを明かしてゐる。又佛話經に

比丘、聚落に在て、身口精勤するも、諸佛咸く憂ひ、比丘、山に在て事を息めて安臥するも、諸佛皆喜ぶ

と云ふことが說かれてあるが、蓋し佛を觀、神に接する宗教的實感體驗を得する要諦は、先づ苦樂の感覺を意識面より遮斷し、また得失、善惡、醜美、眞僞、正邪等の意識をも離脫し、眞美善の叡智界をも超え、純一無相、所謂阿字の大空三昧に住するとき、一切の人間性を離れ、如來常住の心を體せらるべきである。されば釋迦牟尼如來のみならず、クリストもマホメツトも、其他我が大師を始め各宗の祖師、三國に於ける幾多賢聖の得道は、聚落に於てゞなく、山林曠野の地であつた。しかし單に山に住して、飛花落葉無常を覺ると云ふが如きは、所謂小乘的修行であつて、大乘的修養ではないとは古來いひふるされたことであり、眞の修養は必ずしも、山林聚落に關るべきでないとは、一應もつともであるが、俗塵雜鬧の中にあつて、修學得道を成すべく、あまりに末世の我等の機根劣れるを如何せん。かゝる末代の弟子の機根を洞察せられてか、大師高野山を修禪の地として開創せられ、末徒の修養は、此の地に於てなすべしとの御遺告をのこされたが、この御遺旨を奉體具現するのが實に末代の弟子たる我等の責務でなくて何であらう。

高野山は大師入定の地たるのみならず、維範大德、興教大師、行勝上人、覺海大德、淋賢阿闍梨等現身に三昧を證し、今に威靈を仰がれある聖者の遺蹟なれば、此地に住することによつて、冥々のうちにその靈化をうくると共に、密教的精神は如何にして得すべきものなりやを自得せらるゝものがあらう。加之、幾十萬卷の佛籍あり、傳統的精神を傳へたる阿闍梨あり、京阪の地へは三、四時間にて通ひ得らるれば、方法のよろしきを得ば京阪の地にある諸大學と交換講演、或は此等大學の教授を招請し、我が大學の教授の陣營を强化し得らるるものある故本宗大學の所在地として、永く末徒の教養地たるべく、大師の遺旨を現代に具現するに足るものがあらうと思ふ。

もとより我等は、本學の現狀を以て滿足すべきものではない、刷新改善を要すべきもの多々存するのであるから、今後一層宗團全體の篤き援助を得て、宗學の振興と諸弟の教養に最善の努力を盡したいと思ふ。

思ふに眞に教育の實を擧ぐるには、教授各位の熱と誠の授業と、學生々徒の潑剌たる好學求道の念とが、その根元なれば、學生々徒の深い自覺と、學的努力を期待して已まないのである。衲の青年時代より今に至つてなほ自ら刺擊され、自ら鞭撻され、學んで老の至るを忘れあるものは、大師傳統の深い精神の闡明であるが、これはたゞ一人一代にて完成さるべきものでなく、篤實眞摯なる幾多學人に依て大成せらるべきものと思ふ。ことに現代に於ては、宗學も種多の方面よりの研究を要すべきもの存するのであるが、これらの詳細は他日に讓り、大師精神の宣布についての一二を語り、諸子に訴へたいものは、

弘法大師の教義は、印度、支那、日本の三國にわたり幾千年の間に、幾多の論師によつて闡明せられたる教旨をば、因分因人の教なりとし、これら佛教と全然立場を異にせる果分爲本の教、即ち如來の果地に直入直證し、如來の金剛身に同じ、如來に代つて如來の妙業を成ずるを說くものなるが、この大師の教義は、生々榮々神と共に無窮に生きんとする我が國民性に適合せる宗教である。大師はこの教旨を深く體せられ、入定留身如來金剛の定力を以て、天壤無窮の國體を護り、衆生の菩提を成就せられ給うたのである。我等はこの信念を通して、宗教報國の實を擧げんことを期せねばならぬ。國內にます〳〵この教旨を宣布し、思想善導につとめ、國體觀念を强化せしむることにつくすと共に、東西の諸國に眞言密教を宣布し、佛教究竟の道體たる法身大日如來の無邊際の德を以て世界を光被し、興亞の大理想を實現せねばならぬ。

即ち佛教をして、廣く人類救濟の偉大なる宗教たらしめんには、これを歐米の間に宣布せねばならぬ、しかるに佛教は久しい以前より、歐米人によつて研究せられながらも、歐米人の宗教とならないのは、之の因由何れに存するか、速斷し得ざるものあるも、佛教は空の教なり、人生を無の深淵に導く、死の宗教なり等と解することが、佛教に歸し得ない所以であらう。即ち自我の觀念强く、人格を尊重する歐米人には、無我空を說き、または未來往生の淨土教にては相應しないのではなからうか。如來金剛の身に歸命し、無限の佛心に生きる道を開說するのみならず、かゝる道體を現證せられ、龍華三會を期し、この土にその靈活自在の妙用を示現し如來と共に無窮に生きる、眞實相を示されある弘法大師の宗教こそ、積極的生の宗教である。かゝる教旨を宣布し、佛教は空の教なり、死の宗教なりとの歐米人の佛教觀を是正することによつて、佛教は歐米人の宗教たり得るものと思ふ。

即今我等佛教徒の職域に於て、大政翼贊の道一準ならさるべし、英靈を弔うて遺家族の慰安、國策の線に沿うての宣撫の業、或は滅私奉公の原理として無我の理趣を說き、全體主義の原理として、主件無盡の玄趣を開明し、或は天皇を中心に、國家的活動が有機的に行はれ、官民一體の一體主義の原理として、眞言密教の曼荼の妙諦を宣顯し、または如來常住、不壞金剛の定力を以て、國家を護りつゝある大師遍照金剛に歸命し、大師と共に國體を鎭護する信仰の宣布等、即ち高遠なる佛教の原理と、その信仰を以て、國民を善導し、國體觀念を强化することが、もつとも緊要なることに屬す。しかも我等眞言密教徒としては、かの睿尊興正菩薩が、弘安四年の夏勅を奉して男山八幡宮に詣で、仁王會を開き、愛染法を修し、その結願の日、俄かに雷風起り元兵を壓殺したるが如き、偉大なる法力を以て、國家を護り、皇恩に奉答するのが眞言密教徒の本分なるべしと思ふ。學生々徒は、身心を鍛錬し、學業に精勵し、報國の精神の錬成につとめねばならぬ。

（昭和十五年十二月）

四　修道院生に示す

其一　修道の歸趣

我等は佛門に入つて道を修するは、たゞ佛果菩提を期するにあり。されば高祖大師の遺誡に

出家修道本期二佛果一。不二更要一輪王釋梵家一。豈況人間少少果報乎。

密教に世間有相の悉地を成ずる法門あるも、有相卽無相、有相の法門も究竟は、無上大覺を成ずるにあり。

しかして成ぜんとする佛果とは如何なるものなりや。また佛果を成ずる道の如何なるものなりやは、略述し難きものあるも、大日經には

云何菩提謂如レ實知二自心一

と說き給へり。これ成ぜんとする佛果の體性と、その佛果に到達する直道等を說示せられたるものなり。卽ち大日經に、金剛手祕密主、大日如來に對し如來は如何にして法界の自性を現證せる自證の大智と、法界の衆生を等しく攝化し給ふ化他の妙用、卽ち權實二智を成就し給ひしや、また我等衆生は、如何にして、如來と等しく權實二智を成じ、無上大覺位を得せらるゝやとの問に對し、如來の答へ給ひたるは、如上の如實知自心の金言なり。

蓋し此の經文の至頗を繹ぬるに、一切衆生は本有の自然覺體にして、またその自覺體には、自ら其の自體を現證せんとの必然性あり、所謂菩提心の勢力あるなり。しかして佛陀 Buddha 覺者とは、自らの自然覺體を如實に現證し、自の法界體に住し、三世十方に無盡の靈用を示現しつゝある無限の靈格體なり。三世の諸佛は此の如く自心の自然覺體を如實に現證し、無上覺を成ぜられたるが如く、一切衆生も無上覺を成ぜんには、その自心性を如實に現證すべきなり。經に一切衆生は佛子なり本有の金剛薩埵なりと說かれたるは、これ一切衆生は自覺體なり、佛格的實在なることを開示せられたるものなり。此の如く一切衆生は本有の自然覺體なりとの眞理趣は、これ衆生成佛の基礎にして、また一切如來大覺の根底なり。卽ち佛陀とはこの本有の自覺體を如實に現證せられたる靈格體にして衆生も等しく自然覺に住し、しかも此の自覺體には、自らの自性に目覺めんとする必然性あるが故に、發心、修行、つひに無上大覺の佛陀の果體を成ずるに至るなり。菩提心論に我等が發心、修行、つひに無上覺を成するに至る菩提心の行相を勝義、行願、三摩地 Samādhi の三種の菩提心として說かれたるが、その三摩地の菩提心は正しくこれ菩提心の體性にして、また眞言密教の本體なり。先德の釋に三摩地とは因に約していへば金剛薩埵にして、果に約していへば大日如來なりといへるが如きは、よく其の體性を解說せられたるものなりと云ふべきなり。しかも更に要約していへば三摩地の體とは生佛一如の自然覺體なりといふべきなり。

佛陀は已にその心性を現證し、無盡の靈用を法界に示現し、一切衆生の心性に冥々に加被力を與へつゝあるなり。しかして衆生はその自心性に目覺めんとの菩提心の勢力あると共に、如來の加持力を蒙るが故に、いつかは自心自覺の最高至深の要求、卽ち菩提心を起すに至るなり。一切衆生は本有の自然覺體なるが故に、その自性に具する必然性に促がされ、いつかは如實に自心に目覺むる時期の到來すべきなれども、たゞ自心の菩提心の勢力のみに依て自心自覺の究竟位に達せんには、所謂三大無數劫を要すべきなり。しかるに自心の自然覺體を如實に現證せる如來大覺の果體に歸命し、凡佛一如の祕義を體するに至れば、三大無數劫を一念に超越し、諸佛の境界に入り、現身に如來の大果

を成することを得べし。眞言密敎の卽身成佛とは、かゝる境地を體せるを云ふなり。

しかれば我等は如何にして如來の體性に歸命し、如來の果德を成ぜらるべきか、佛敎實修の道、たやすく語り得ざるものあるも、顯敎にては、成佛とは法（Dharma）を證悟するにあり、しかしてその無相眞如の法を證見せんには般若の眞智に依らざるべからず。されば顯敎にては、空を觀じて分別の妄念を離れ、無分別の般若の眞智を得て、法を證悟するを以て敎の根本義となし、修行道の大本となすものなり卽ち六度萬行を明かすも要は止觀の二門にして禪定に住し、法の實相を觀じ、無相般若の眞智を得て、煩惱を斷じ、法を證悟して無上大菩提を成ずるにあり。

しかるに密敎は般若の眞智を得て、法性を現證せる如來の三摩地の體、卽ち如來自證の果體に契合する道を明かすが故に、智よりも信を以て入道の要門となす。大日經疏に曰く

菩提心卽是白淨信心義也。釋論亦云佛法大海信爲二能入一。如下梵天王請二轉法輪一時佛說レ偈言上。我今開二甘露味門一。若有二生レ信者一得二歡喜一。此偈中不ニレ言施戒多聞忍進禪慧人能得二歡喜一。獨說二信人一云云

又曰く

然有二一事一眞實不レ虛。所謂卽是決定諦信云云

密敎にては能所を離れたり純一淸淨の信を明かす。阿字觀等を修し智を表とすることあるも、密敎は曼荼羅の諸尊に歸し、衆生の三業をして如來の三密に同せしめ、入我我入、生佛平等の三密の體を得するを明かすが故に、信を入道要諦となす。

しかして信をして益々堅固不動ならしめ、生佛平等の境を體得すべく行を修すべきことを明かす。その所修の行として、三密の觀行を說くも、殊に如來の名號を念誦じ、その本誓三昧耶を表現せる眞言念誦の法を說く、本尊の眞言を晝夜四時に念誦することに依て、本尊と入我我入、感應道交の境に入り、如來の果德を成ずる道を示す。卽ち無執無著、心に月輪を觀じ、本尊の眞言を念誦することに依て、如來の果境に直入せらるべきことを說く。

しかして其の眞言の念誦、三密の修行に依て成ぜらるゝ悉地の果に有相と無相とあり、この有相無相の祕趣を體するところに、正しく眞言密敎の敎理安心の正意を領得せらるべし。卽ち密法を修して成ずる悉地に有相無相あるも、多くは有相の悉地なり。有相の悉地に息災、增益、敬愛、降伏、延命等の別あるも有相の悉地は、佛を念じ人事のある一事に卽して如來の威神力を體得するを云ふ。しかして密敎は卽事而眞の實義を說き、人生生活に卽して如來の性德を顯現すべきを、正旨となすものなるが故に、人事のある一事に卽して、如來の威神力を體するは、やがて人生生活全體を、靈化する道なれば、有相の悉地をば入道の初門となす。卽ち有相の悉地の當體は、なほ生滅變易あるをまぬがれざれば、有相悉地の當位のみにては眞實の安心を得ざれども、佛を念じて特殊の深祕を感得するに至れば、如來の實在、法門の威神力を如實に體驗せるが故に、法爾として無相の大悉地を成せらるゝに至るなり。無相の敎意は如來金剛の心に住するを得て、逆境に處するも、なほ從容として安んずるところあり、逆境にも如來の恩寵を感じ、つひに順逆、苦樂生死を一如に見る底の大安住の境を體するにあり。されば經には如來に歸命し、如來の威神力を體するに至れば、三業の所作一切を如來に奉獻し、如來金剛の心に住せらるゝに至るを得、しかして如來金剛の心に住するに至れば、それより以後の三業の施爲は、凡てこれ佛作佛業にして、涓滴の善根にも無盡の功德を具し、如來に代り衆生を成就し、佛國を莊嚴するものなることを說けり。我等は觀佛久修、かゝる境地を體し、眞實の菩提を成ず

るを、修道の歸趣となすべきなり。

入山之辭

謹惟寶壽兩門之所傳實爲　宗祖大師法敎之根本義本院之稟承洵有待於大器宏材之法匠也高岡大僧正以湛蘊之學敦重之德住持積年統督勸學修道之場於事敎二相淵源之地聲績彰於世矣今也僧正進登本宗之極位院事場務之有缺　穆韶　以不敏之資承乏於名跡之紹繼桷椽之材梁棟之任唯恐其難堪也然三地兩所之冥助與闔山諸大德之扶提及本宗諸學匠之輔導得彌縫前德後俊之間則洵爲望外之幸已

昭和九年九月二日　　穆韶謹白

初住寶壽院書懷

南山古名刹　今日賜升登　林密溪邊寺　雲藏樹下陵
快公千載雋　覺老百年朋　明月東天出　皎乎和佛燈

同

住山年數十　纔免世塵侵　修德嘆其淺　求眞恐末深
近辭南谷院　更入北邱林　快覺今雖遠　餘流猶可斟

同

四十年來住此山　往還唯是白雲間　幽窓深座思無限　明月孤懸萬境閑

寶壽院憶快覺兩公

五百年前道業功　至今後學仰高風　清明一片南山月　猶照先賢故梵宮

昭和九年秋九月　　穆韶

其二　修道の精神を起せ

大日經の世間、成就品等に、我等眞言行者が、本尊を觀じ、如來の德を成就するについて、重要なることがらを示されてある。それは本尊を念ずるとき、本尊の心の上に於て圓明の月輪を觀じ、その月輪の中に本尊の種子眞言を觀じ、その觀に依て佛德を成ずる法門である。卽ち台藏の大日なれば a 字、金剛界の大日なれば vam 字、觀世音なれば sa 字、地藏尊なれば ha 字、不動尊なれば hām 字、等、各々の尊の種子を本尊の心月輪の上に觀じ、或はその眞言を觀じ、しかしてその種子眞言の文字が明白に、本尊の圓明の月輪のうちに現じその眞言の文字右に循環して現ずると觀じ、行者の一心をその種子眞言に住せしむるのである。（初心の行者は眞言の文字を凡て觀布すること易からざるが故に、ただ種子を觀ず）次にその種子、眞言が本尊の心月輪より流出して、一一の文字淳淨の乳の如く明珠を貫くが如く、また光鬘の如く間斷なく、行者の頂より或は口等の一處より、行者の身中に流入し、充盈浹洽、如來光明の甘露水を以て、全身を灌灑せられたりと觀じ、また行者の誦ずる眞言、本尊の御足より入りて、本尊の心月輪に現じ、其の心月輪に現じたる種子眞言また流出して、行者の心中に流入す、此の如く循環を相續して斷えざると觀ず。かゝる觀に住しなは、無始以來の身心の罪垢淨除せられるのである。

此の如く本尊の種子眞言が行者の心中に流入するが如く、本尊の印契及び尊形が行者の身中に流入し、本尊と、一

體無二の祕趣を體すべきことを明かさる。此の如くの觀に住して一洛叉 lakṣa 卽ち本尊の眞言を十萬遍を念誦すれば、靈感を得することあり、もし一洛叉念誦して、なほ證驗なきときは、更に二洛叉、三洛叉卽ち一月二月三月に亘り、念誦せば必ず證驗あることを說かれてある。なほ洛叉の深祕釋をなし、洛叉とは見の義なり、卽ち念誦する眞言の實義を觀じ、自心の菩提心に住し、佛心を見る義なる祕義を明かさる。如上の觀は一月二月三月等の久しきに亘り、本尊の眞言を念誦すべき所謂洛叉法についての、行者の觀心を明かされたるものなるも、我等日日修する供養法の正念誦や、散念誦のとき、其他の念誦、乃至讀經のときも、かゝる祕觀に住すべきである。

衲は如上の觀に住すると共に、また日輪觀に住して念誦をなして居る。卽ち本尊日輪の中に在しますと觀じ、本尊の大智大慈の光明は、日輪の光明の如く一切を照らし、行者の身心を照破し盡し、身心全く本尊の光明と化し、本尊と一體無二の觀に住するのである。諸尊の中にて日輪に住し給ふは、金輪佛頂、愛染明王、乃至日輪大師等である。また菩提心論に、行者の心上に日月輪を觀ずることを說かれてある。しかし月輪は觀じ易いが、日輪は日沒また日出の相は觀じ得らるるも、天に中せる相は觀じ難い、觀無量壽經には西方に沒せんとする日を觀じ、西方の淨土を願求すべきことを說かれてあるが、衲は日沒よりも日出の相を觀じ、日輪の中に本尊在しまし、本尊の光明日輝の如く、行者の身心を照盡し給ふと觀じて居る。大日如來の光明をば世間の日輪に比況し、除暗遍明、能成衆務、光無生滅の三義として釋せられ、大師は聲字義に、四種法身各各の法界を照らし給ふより、四種法身凡て大日如來なる祕釋をなし給ふに依るも、日輪をば大日如來に比況し、諸尊皆日輪に住し給ふと觀することは敎旨に相應することゝ思ふ。なほ自宗は曼荼羅の諸尊を信奉することを明かすよりたちまち觀れば信仰に統一を缺くやうに思はるるも、日輪を大日如來に比況し、諸尊皆日輪に住し給ふと觀ずるところに、信仰の統一を得らるゝのである。大日如來の一體速疾力三昧のうちには、諸佛悉く攝盡し給ふのである。卽ち大日如來の始本不二の大覺の體には、諸佛共住し、同一覺となり、その大智大慈の光明は、法界の衆生を等しく照らし、我等は迷妄の故に知らざれども、往昔大悲本願力に依るが故に、我等の心根に常に加持力を與へ給ひつゝあるのである。

しかし分別妄念を離れざる因人の如何なる精神作用に依るも、如來の眞身を肯定的に知り得ないのであるがしかもかかる無相不可得の如來をば、或は蓮華觀、或は日月輪觀、或は阿字觀等として觀見せしむる妙門を開くものは眞言密敎である。しかして何れの觀に依るも、自心の本性、如來の大覺に證入し得らるべきも、今暫らく日輪觀に依ることにして居る。或る時はまた本尊日輪に住し、日輪の光明身心を照盡し給ふと觀じ、自心のうちに月輪を觀じ、自心の心月輪と本尊の日輪と一體の光明となりと觀じ、つひに日月輪も、本尊も自身をも忘れ、無想無念、大空三昧に住し、如來自證、久遠眞實の光明に住する觀を凝らして居る。かゝる觀に住することに依て、生佛一體、自身卽ち金剛薩埵の眞自覺に達せらるるのである。

衲は數十年來日々不動明王の法を修して居るが、今年の元旦にも常の如く本尊の供養法を修し、如上の觀想を凝らし法悅に住し、大師の廟前に詣で、歸途覺鑁堂の前にて上人の像を拜し、南方を見るに、千樹の氷霜旭光に映し、玉樹瓊林いはんかたなき莊嚴なる光景を現出せるを見、更に伽藍に參拜して、根本大塔の高く晴空に聳え立ち、法身の三昧耶形を表せるを拜し、法喜に堪へないものありしと共に、一種の感を深うするものがあつた。衲は祖廟に詣づるごとに、覺鑁上人の堂前に禮し、大菩提を成ぜずんば止まずとの、偉大なる勇猛心を以て、如實に道を修され、現生

に證果せられたる上人の遺風を欣仰して止まないものである。

さうして上人と前後して此山に住し、如實に道を修し、菩提を成じ、法驗を示されたる祈親、明算、眞興、維範、乃至淋賢、覺海、行勝等の諸大德の精神を復活せしむるにあらずば、我等の魂の救濟は勿論、本宗をして眞實の敎化力ある、大宗敎たらしむることが、出來ないと思ふ。法は人に依て弘まると云ふことを如實に示され、高野山をして淨土としての光を放たしめたるその時代のことになほ一言及ぶであらう。高野山は大師入定後八十餘年にして、かの三十帖策子の事より、無空座主門徒を率る離山せしより約百年間ほど荒廢に委せられてあつたと云ふが祈親明算等の、諸德出でゝ復興せらるると共に、覺鑁上人等の眞摯なる修道者相續いて出で、上下の歸仰を得て、高野山をして信仰的に最も光輝を發せしめたるは、此の時代であつた畏くも、此間に、白河上皇、鳥羽上皇、後白河上皇、後鳥羽上皇、後嵯峨上皇、後宇多法皇等、ことに　白河上皇兩度、鳥羽上皇の如き三度も鳳輦を此の山に運ばせられ給ひたるは、もとより大師の靈德に依るものなるも、當時、道行精修、悟解深遠、名利の域を超脱し、ひたすら修禪を事とする高僧、神通法驗、佛陀の化現と仰がるる知識の存したからであつた。

我國現代の佛敎界を觀るに、僧は三學を修せず、殆んど如來の正法を無視せるにあらざるなきやの感を懷かしむるものがある。これには種多の原因あり、單に僧徒の墮落とのみいひ難きものあるも、佛意に背き、祖訓に反し、佛道の中に於て却つて墮獄の因を造りつゝあるものにして、正法の復興など期し得らるべくもなく、自己の魂の救濟すら至難とするところである。凡てが出家本來の精神を體し、三學を双修し、如實に道を修するに至らんことは願ふところなるも、現代に於てかゝることを望むは殆んど至難のことに屬す。されば現代の生活を認容し、そのまゝにして救はるゝ道なかるべきか。また現生活に卽して實修し得らるる易行道なきかを深思探討するも、大道異趣なく、正法は萬古不變である。卽ち解脫道の要諦としては、信と行とあるのみである。大日經に說かれたる三句卽ち大信、大行、大果の妙道は、これ顯密の諸敎に通じ、一切の宗敎に一貫せる眞趣である。その菩提心爲因の大信の釋のみ見れば、深信あれば、餘他の行を修せずとも、無上覺を成ぜらるゝやう說かれあるを觀るも、之は特に信を本としての釋にして、また大機は深信の一道より如來の大果を成ぜられることを明かされたるものである。しかも一般は信と共に行を修し、行に依て眞實の信を得て無上覺を成ぜらるるのである。宇宙の秘義は人間の努力に依てのみ開發せらるるが如く、宗敎の眞體も人間の努力に依て開顯せらるるに至るのである。

その努力とは信と行とである。卽ち如來の自證化他大智大悲の光明は法界に滿てるも、しかも如來は眞接無媒介にて、其の靈相妙用を顯はし給はず、人間の眞摯にして敬虔なる信と行とを契機として、顯はれ給ふのである。信と行とに依て如來の妙境に趣入せらるるのである。しかれば其の信と行とは如何なるものなるや、委釋をなさざるべからざるも、そは他日に讓り、こゝに一應の解をなさば、大師の御釋等に依れば、如來の境界は、あたかも月や、星が天上にあり、各々光を放つて、しかも其光り冥然として相融し、一つの光りとなりて下界を照すが如く、三世十方の無盡の諸如來は各々の大覺體、各々の自證の法界三昧に住し、しかも其の自證化他、大智大慈の光明は冥然一體となりて相融卽して、等しく法界の衆生を照らし給ふのである。我等衆生は未だ如來を見奉る心眼開けざるが故に自ら知らざれども、冥々のうちに三世十方の如來の加持力を被りつつあるのである。

また我等も深くその本性を尋ぬれば、如來と等しく平等平等に法界に遍滿し、如來大覺の果體に住せるのである、

即ちその本性は如來の境に住しながら、無明煩惱の故に、その眞相を自覺せず、如來と無限の隔りを生ずるに至りしものである。しかして他鄕にある一子には、父母の慈念が特に加はるが故に、子もまた故鄕を忘却し得ざるが如く、我等衆生には、その本性に目覺めんとの必然性あると共に、如來の威神力加はるが故に自心の本性を知り、如來の果體を思慕する菩提心を法爾に生じ來るのである。一念歸命の淨信を起すに至るのである。しかしてかゝる信念を生じたる最初は、ただ如來をば無限の彼岸、法界の頂に在しますと思はれ、超越的實在者としてのみ如來を信ぜられるのである。經疏にはかゝる信念生じなば、その信を淨化し純一無雜の淨信を得て、如來の果德を現身に成ずる信念向上の歷程を明かされてある。即ち無染無著己を空うし、空三昧に住し、如來を信じなば、澄淸の水面に月の影を宿すが如く、如來の威神力が行者に加り種々の靈相、即ち佛境界の相を見ることあり、しかもかかる靈相を見ることあるとも、その靈相に愛着せず、無念無相の空三昧に住しつつ、いよ〳〵淨信を凝らして、如來を念ずべきことを明かせり。即ちもし水面に現せし月影のみを見て、仰いで天上を望まずば、眞の月を見ることを得ざるが如く、入信の最初に如來の靈相を感見することあるも、そはなほ如來の影像にして本質にあらずと知り、無執無著にして如來を念誦すべきことを說かれてある。かくの如くにして淨信究竟せば、如來眞實の自證の光明を見、自ら能所分別の無明の迷妄のぞかれ、如來の果體に、法爾に住せらるべきことを示されてある。即ち光を見れば、暗が自ら除かるるが如く、神通の寶輅に乘せば、忽ちに月宮に至り得るが如く、淨信を凝らして三密の法門を修することに依て、如來の果境に直入直證せらるべき秘義を明かさる。かくの如く一念歸命の淨信を起し最初本尊を超越的にのみ見て念誦せしものが、久修練行、一洛叉等に至り、純一無相の淨信を成じ佛德を體するに至るは、これ信なりと共にまたこれ行である。しかして眞言密敎の行をば、常に五相三密の行なりと云ふ。五相とはこれ如來の種子、三形、尊形を觀することにして、要は如來の靈相を觀ずることである。また三密もこれ如來を信念し、如來と冥合するに至る秘法である。されば五相三密とはこれ如來を觀念することである。しかれば密敎の行とはかくの如く唯如來を信念する觀行のみなりやと云ふに、密敎の行は五相三密の觀行のみならず、廣くいへば如來を念じ、如來の御心に依れる萬行即ち六度等の行も即身成佛の行となるのである。またその三密の行についても、一密二密の行に依て即身成佛の大果を成ぜらるるや、或はまた三密双修せざるべからざるやのこと中古の學者異義をなす、即ち古義には三密双修の義を立て新義には一密二密の行にても、即身成佛せらるべき義を成ず、しかしながら經疏の眞意を深く尋ぬるに、行者の身口意の三業をすべて如來に奉獻し、自身の三業の自性空を觀じ自身をして、如來金剛の身に同する淨信の上の行でなくば、たとひ三密双修すとも即身成佛の眞實の行とはならないのである。大乘佛敎ことに眞言密敎の本義よりいへば、究竟は無作の作、不信而信、即ち無執無著にして佛道を修するを要とするのである。かかる敎旨をたちまち聞けば難信難解の法門のやうであるが、我等は自心の本性に住すると共に、この自性心を如實に現證し給ひたる如來を歸命し、その德を成せんとして如來を信念するは、これ水の低きに流るゝが如く、自心の本性に歸り行く眞實道にして、これ人性に順じ、その實相を現證し行く法爾の歩みである。

しかして今ここに述べんとするは、如何にしてかかる道を如實に修せらるべきかのことである。現在我等の生活に即してこの眞實道を如何にして、成じ得べきかとのことである。眞實道を如實に修すると云ふことについて至難の問題は、最尊無上の法門を修せんには、その身器を淸淨にせねばならぬことである。即ち身器を淸淨にすると云ふこと

は淨戒を持することなるが、現代の生活狀態で戒を具足して受持すると云ふことは、尤も至難とせらるるところである。淨戒を具足して受持し、身器を清淨にして、如來果上の法門たる三密の妙行を修することは、修道の要諦である。ことに持戒は佛道修行の大本なれば、勇猛堅固の心を以て受持せられたいものではあるが諸戒具足して持されぬ因緣あれば一切の戒の根源たる佛性三昧戒を堅持することを、特に留意し工夫せねばならぬ。高祖大師は眞言行者は顯密の二戒を堅固に具足せざるべからざることを教誡せらるると共に、たとひ諸戒を具足して持するとも、諸戒の根源たる佛性三昧戒を持せずば、眞實の戒を具せるものにあらざることを示され善無畏三藏は出家者にして、惡因緣の爲めに十善等の戒を持し得ざることあるとも、自性本源の戒を失せざれ、たとひ十善等の戒を持し得ざることあるとも、なほ成佛し得べし、自性本源の戒を失しなば、永く成佛の期なかるべきことを說かれてある。

大師の御誡誡に

密戒者所謂三摩耶戒。亦名二佛戒一亦名二發菩提心戒一亦名二無爲戒一等。如レ是諸戒十善爲レ本。所レ謂十善者身三口四意三也。攝レ末歸レ本一心爲レ本。一心之性與レ佛無レ異。我心衆生心佛心三無二差別一。住二此心一卽是修二佛道一。乘二此寶乘一直至二道場一。若上上智觀卽身成佛之徑路。云云

卽ち顯密の諸戒は十善に歸し、十善は一心に歸す、しかして一心の本性は佛心と體を同うす、されば一心を深く佛心に住せしむること、これ一切の惡を離れ、一切の善を修する本源たるより、佛心に住するを究竟の戒となす、これ一切の戒の歸趣である。さればたとひ二百五十等の戒の條目を具足して、これを受持するとも、この自性本源の戒を持せざれば、聲聞、緣覺乃至三乘の菩薩等の如く、三大無數劫を經とも、なほ成佛すること能はず、この佛性三昧耶の戒を持し、顯密の諸戒を護り、身器を清淨にして、三密の法門を修行するはこれ卽身成佛の徑路なることを示さる。卽ち佛性三昧の戒とは、我等の身心の自性空を觀じ、如來金剛の身に同ずることである。我等の身心を擧て如來に歸命し如來のうちに己れを空うし、佛德を體することである。無執無着にして如來を念ずることである。されば佛性三昧耶はこれ戒なりと共に定なり、信なり、修道者の堅住すべき究竟の道體なり、此の如き淨戒、此の如き淨信に住して、本尊の三密門を修することは、これ修道者の根本の要件である。

しかして如實に修することにせば、日々三時の行法をなすべきであるが、三時の行法出來得ざるときは、日々一度は本尊に對し供養法を修せねばならぬ。もし日々修し得られないならば、一ヶ月の間に或は十日間とか、或は一週間とか或は五日間とか眞に身心を清淨にして如實に行せねばならぬ。もし如實に三密の供養法を修し得られないならば、或は日々本尊の眞言を千遍萬遍念誦すべきである。

或はまた一ヶ年のうち春秋二期なり、或は夏期等に道友相語らひ、または一結衆一團となり、適當の會所に同住し、一週間なり、十日間なり、洛叉法等修するやう努力せられたいものである。修道の志念だにあらば、實修の機會や方法は種多あることゝ思ふ。現在は各地方の青年團ですら、夏期適當の處に共同生活して、修養に專心する時代であれば、教家たるもの大に猛省せられたいものである。

我が勸學寮及び修道院の卒業生は今回にて殆んど六百名に達する。思ふに一縣下に數名は在住のことであらうが、互に策勵し、他をも勸誘し、修道に專心し、一宗內に修道の精神を振興されんことを望んで止まないことである。かく眞摯なる信念を持し、修道に專念するに至れば、自ら教家としての道風も備り、自然に檀信徒等も心から尊敬する

に至り、眞の教化の實を擧げ得らるゝことゝ信ずる。

我等は佛祖の教旨に則り、またこれを實修せられ、證驗せられたる先德の行迹を尋ね、眞摯なる信念を持し、修道に專心するより外に、自らの魂を救ひ、自他の大菩提を成就する道がないのである。（昭和十一三月）

五　眞言の觀誦

眞言密教には、入檀灌頂、護摩法の修行、曼荼羅の建立、三密の行軌等を示すが、これを普通佛教に對比するにやゝ色彩の異なるものあるを見るのである。其中今眞言行者の念誦する眞言のことについて聊か述べようと思ふ。

今より約千二百十年前、即ち唐の玄宗皇帝開元四年印度より支那へ大日經を請來して、飜譯したものは善無畏三藏であつたが、その善無畏三藏より大日經の要旨を聽聞し、大日經疏二十卷を記述せしものは唐の一行禪師である。其大日經疏の中に人の遠行するに羊に乘じて行くもの、また馬に乘るもの、神通に乘ずるものの區別あることを明かし、眞言密教は神通乘であることを示されてある。即ち眞言密教の教に依て修行するものは、發心するや直ちに凡身に即して速疾に佛果に到り得ることは、例へば神通力によつて甲地より乙地に一念に到達するが如しといつてある。

行者以二此三方便一。自淨二三業一。即爲二如來三密一之所二加持一。乃至能於二此生一滿二足地波羅密一。不レ復經二歷劫數一備修中諸對治行一。故大品云或有下菩薩初發心時即上二菩薩位一得中不退轉上。或有下初發心時即得二無上菩提一便轉中法輪上。龍樹以爲如下人遠行乘レ羊去者久久乃到。馬則差速。若下乘二神通一人於二發意頃一便至中所詣上。不レ得下云中發意間云何得中到。神通相爾不レ應レ生レ疑。則此經深旨也。云々

密教の經典に三密の法門を說かれてあるが、その三密の法門は、果上の法門にして、身口意業平等々々にして、三密互に統一せられ、調和せられ、自在無碍の妙用ある佛果上のものがらである。かゝる調和統一ある果上の平等の三密を、三業分離し、身心統一を缺ける我等衆生が親しく修することに依て、如來の平等の三密に加持せられ、生佛の三密互に感應相應し、凡身に即して速疾に佛果に到達し得らるべきである。

また密教と顯教との成佛の遲速のことを、月を見る喩によせて示されてありますが、顯教は地上より雲霧の除くを待て月を見るが如く、煩惱を斷じて菩提を證せんとするものなるも、密教は神通の寶輅に乘じて地上より直に月の世界に行き、月の世界に住して月光を賞するやうに比すべきである。即ち月の世界に住して月光を見んには、雲霧は月光を遮へぎる障害物たらずして、却て月色の光彩たるが如く、三密の神通乘に依らば、凡身にして煩惱を斷ぜず、佛果に直入し、如來果地のうちに己を空うし、如來金剛の身に同することを示されてある。

眞言とは三密の中の一密である。眞言とは梵語にては mantra とか vidya とか云ふのであるが、支那の舊譯家は多く咒と譯した。それは佛教が未だ支那に傳はらざる以前より、支那には咒文と云ふものがあつた、その咒文を誦して、種々の災が除かれ福德を得たる如く、密教の mantra を誦することに依て、不思議の靈益を得られたからであるが、新譯家は多く眞言とか明とか譯した。

vidyā を明と譯したるは vidya は如來の大光明のうちに現じたる文字なるが故に、また此の文字を念誦することに依て、無明を除いて大智慧光明の佛境界に達せらるゝからである。mantra を眞言と云ふは、疏には一一眞言皆如來妙極語也なりとも釋せられ、如來の言語は眞實にして虛妄なきが故に眞言と云ふ。

眞言とか明とか陀羅尼とか云ふものは梵文である。かゝる文字言句に何故に、甚深無量の巧德を有するやにつき、大日經疏に委細に說かれてある。眞言の一字一文に無量の功德存するは、これ如來が三大無數劫の修行に依て、積集し給へる無量の功德力を以て、此の文字を加持し給ひしゆゑである。如來が自在神力を以て、文字を加持し給ひしが故に、この文字に無盡の功德力があり、如來の自在不可思議の力があり、文字が如來の身心であり、法曼荼羅身なりと釋せられてある。かゝる功德力ある文字であるからこれを念誦することに依て、凡身がそのまゝ如來の不思議力を任持し、凡身を轉せず佛身を成じ得らるゝのである。疏には更に如來が文字を加持する所以を釋して、如來が如何に無碍自在力を以てするも、もし文字本來實相の體でなくば、それを加持して無量の功德力ある法曼荼羅身とならしむることが出來ない。しかるに文字の自體本來法性自爾の實相の體であるから、これを加持して法曼荼羅身となし得らるゝのであると示されてある。されば加持の深旨を尋ぬれば文字卽ち實相法身なる理趣を開說するにあり。卽ち聲字を念誦し聲字の不可得を觀じ、聲字より實相に悟入する道を示すものは眞言密敎である。

密敎の本旨よりいへば、文字の自體のみが、實相なるにあらず、色、聲、香、味、觸、法の六塵本來實相である。しかれば、如來が何故に六塵の中、殊に聲塵の文字（眞言の文字は色塵に通ずるも、もと聲塵爲本なり）を加持し給ひしやと云ふに、こは卽俗而眞の義を知らしめんが爲めなりといへり。卽ち六塵は皆無常の俗諦の法なるも、而も六塵中、卽生卽滅、最も暫有無常なるものは、聲塵である。その六塵中。最も無常なる俗法に卽して實相の妙諦を體得せしめんとして、六塵中殊に聲塵の文字を加持し給ひしものである。また此土衆生耳根利故、釋迦卽以聲爲說法、此の如く此土の衆生は聲塵より、得悟し易き傾きあるゆえ、六塵の中聲塵を加持し、文字を觀じて實相に入る道を示されたるものである。或はまた印度にては古くより、文字を尊重して神聖視する風習があつた。卽ち梵字はこれ梵天の人間に啓示せるものなれば、梵字はこれ梵天の身なりとの思想があつたが、かゝる文字を神的視する風習ある人々をして、文字を觀して佛敎の第一義諦たる實相を體得する道を示せしものは眞言密敎である。

この眞言念誦の方法は、眞言の修行門に屬するが故に、こゝに詳く述べ得ざるも行者はたゞ疑ひなく無念無想にして念誦すべきである。或は行者の誦する眞言を、本尊の心月輪のうちに觀し、その心月輪より字々皆光明を放つて流出し、行者の口中より入り身中に流入し、身分に周遍して無始の業障罪垢を除き、また我が口より出でゝ本尊の足下より入つて心月輪に至つて住す。かくして旋轉觀誦、つひに感應加持の境に入り、生佛能所の二相を忘れ不可得大空に住するに至れば、音聲法界の觀に住するを得、此の境地に住するに至れば眞言の念誦は本尊よりいへば法身說法の聲にして、行者よりいへば我れこれ如來の自覺體なりとの、歡喜の叫びである、行者久習怠らずば、眞言觀誦の一門より、無碍自在の如來の境地に入るを得るのである。されば經疏には加持身を知れば本地身を知り、本地身を知れば自心を知るとも示されてある。卽ち如來の加持身たる眞言を念誦することに依り、つひに本地法身に歸入し自心の大菩提を體驗せらるゝのである。

六修道日誌

自分はかゝる修行に依つて、かゝる靈感を得たと云ふやうなことを、語るを欲せざるものであるが、入信の道標に、求聞持法や、八千枚修行中の靈感を聞かんことを請はるゝ人あり、こゝにその一端を記することにした。

虚空藏菩薩の求聞持法を修したいと發意したのは、今より二十年も以前のことであつた。たゞ同法の儀軌に、結願の時が日蝕か月蝕に當たるやうにして、行ずべきであると說かれてあるより（日月蝕にあらずとも結願すべき法緣の日は他に存するも）久しき以前から、春になれば、曆を見て、日月蝕の有無を調べ、ことに暑中休暇の終り八月の末か、九月の上旬ころ、都合よく運り來たらんことを望んで居たが、ちやうど大正十三年八月十五日午前三時三十一分に月蝕あり、また同八月三十日午後六時十分に日蝕のあることを知り、その年宿願を果したいものと信じ、その春より前行を修し、種々準備をした。さうして阿波の太龍寺に於て修したいと思ひ、當時金剛峰寺座主で在らせられた泉大僧正は、阿波の御出身で、また平昔、知遇を辱うしてゐたから、同大僧正より太龍寺の松本老僧正の方へ依賴狀を出して貰うた。ところが太龍寺より同國萬願寺上野師を介し、同山で求聞持を修したいと願ひ出での人が他にあるので、一應その方との交涉を遂げた上でなくば、確答が出來ぬとの返信を得たのであつた。が、久しうして回答がないので、親しく太龍寺へ詣でゝ御願ひし、其の上また求聞持堂等をも拜見しようと思うて、同年六月十五日早天に高野山を下り、夕方阿波今津村萬願寺へ着いた、同寺へ最初行つたのは、同寺主の知人の方で太龍寺にて求聞持を修せらるゝのは、何月頃の豫定なりや、また小衲の修行が、其の方の迷惑ともなるやうなことになりはせまいか一應其等の實狀を聞きし上にて、太龍寺へ詣でようと思うたからであつた。ところが同寺主上野龍珪師も、知人よりの依賴もあるし、春來一度太龍寺へ詣でねばならないといひつゝ延ばして居られたが、ちやうど今日太龍寺へ參られたとて留守であつたが間もなく歸來せられた。またその日、太龍寺の執事であられる島村泰雅師が、萬願寺の近隣へ來られ、小衲のことを聞き、翌朝萬願寺の方へ來訪せられ、小衲太龍寺にて求聞持を修することを決定して下さつた。小衲より十五日に阿波へ行くと云ふことを、太龍寺の方へも萬願寺の方へも通知もせねば、交涉もして置かなかつたのに、かやうな運びになつて、求聞持を修することが決せられたことを不思議に感じありがたく思うた。かくしてその夏太龍寺にて求聞持を修することが決まつたから、同日太龍寺へ參詣し、本尊を拜し、求聞持堂をも見た。求聞持堂は往年、高祖大師求聞持を修せられ、大悉地を成じ給ひし聖跡と峰を同じうし、老杉鬱々、幽寂閑靜眞に密法を修するに適せる靈地なるを知つた。なほ寺の方にて此の山で求聞持を修する者にして障碍の爲めに中途にして止めるものが多い、近くは三四年前土佐の人で修行中、ある魔形を見たとて直に下山した、それ以來求聞持堂に入つて修行したものがないと云ふことを聞き、泉大僧正より同大僧正青年の頃、當時事敎の大家にして、一宗の大德と稱せられし某和上、太龍寺にて求聞持を開始せられたがある魔障の爲めに中止せられたことがあつた、太龍寺にて求聞持を修するならば、よほどたしかな信念がなければならぬと申されしことなぞ思ひ出され、危懼の念が起らぬでもなかつた、病弱な身にて、この深山の一小堂に五十日に亘りよく念誦に堪へ得らるゝであらうか、鄕里にある老親が夏になれば、往々病まれることがあるが、何にか障碍となることが起らぬではなからうか、しかし自分では決心して居ることではあるが、いよ〳〵修行するとすれば、學校始め諒解を得て置かねばならぬこともあり、最後の依賴狀は高野山へ歸山の上發すべければ、諸事配慮を煩はしたき旨、太龍寺の方へ申して一應高野山へ歸つた。同月二十二三日の頃であつたが、太龍寺へ送る最後の依賴狀を認め、いつものやうに朝の修法をなし、室へ來て見れば、前夜認めて机の上に置いた手紙の上に紙片の掩ふはれあるを見た、何に心なくとつて見れば、不動明王の御影であつた、その御影は先年南院より頂戴したものであつたが、そのころそれを取り出して机上に置いたものではなかつた。常ならば氣に止めないこ

とであらうが、最後の決意を認めて太龍寺へ送らうとする書狀の上に、明王の御影の在ませるを見、明王の加護に依り、魔障なく修行をなし得らるゝことの自信を得た。その春求聞持を修しようと思ひ起つてから、太龍寺へ登つて求聞持法を開始するまでに、如上のやうな不思議と思うた出來ごとが、約十回ほどあつた。

供養の支具や其の他の準備をなし、同年七月十日に太龍寺へ上り、十一日の午後求聞持堂へ入り、十二日の朝開白したが、修行について最も關心の一事は、正しく一百萬遍念誦せんとする虛空藏菩薩の眞言のうちに、文意の明かでない語が一二あることであつた。もつとも一應の解は出來るも、實際の語基が判然せぬので、西藏經中にある虛空藏菩薩の眞言と對照したならば、あるひは明了になることもなからうかと思ひ、河口慧海師及び寺本婉雅師に依賴して、調べて貰つたけれど明かにならなかつた。もつとも字相よりいへば、不明の語があるにせよ、字義より觀れば一字一文皆入法界の法曼荼羅身にして、先聖已に此の眞言を念持し、悉地を成じ給ひしものなれば、たゞ無念にして念誦すべきであると觀念し、念誦して居たのであつたが、時に其の不明の字相のことが思ひ浮ばるゝので、これが此の修行の障碍になりはせぬかと懸念せられることもあつた。しかるに開白後數日にして朝々起床前靈夢を感じ、種々の好相を見たから、この眞言を念誦することに依つて、悉地を成ぜられることを確信し、淨信を凝らして念誦した。

祕密經の經軌の中に、密法を修せば悉地の成ずる前相として、種々の好相を見、靈夢を感じ、或は種々不思議の佛境界を感見することがある、しかも感見せしその境界は、凡てこれ從因緣生法にして、無自性空と觀じ、感見せしことがらに味着を生じ、愛執をなすべからざることを詳說せられ、また佛法は法爾なり、先づ事の中の成就を以て、然して後に淨慧の大空を用ゐて之を觀察せよ、即ち是れ出世の成就なり等の教旨は、久しう修習せるところであつたから、無執無念大菩提心に住する心地の工夫につとめたが、法門の功德力の深廣なること、如來神變加持力の廣大なるに、幾度か感激の涙をながした。念誦中は毎朝二時から三時の間に起き、老杉鬱密わづかに月光の漏るゝ露地に出でゝ、行水をなし、閼伽井に行き閼伽を汲み、明星禮等の作法をなし、入堂して正しく念誦にかゝるのが、四時過ぎから五時頃になり、午前の一座が終るのは十時過ぎ十一時頃になつた、午後は一時頃から開始して、五時か六時頃終つた。かくして毎座一萬遍即ち日に二萬遍の念誦をなし、念誦終つてから夕方、伽藍の參拜に出で、はるかに高野山の方に向うて、大師明神を禮し讀經したが、其の處より下の庫裡見ゆるので、いつ五十日の行が終り、かしこへ出でらるゝであらうかと思うたこともあつたが、菩薩の三大無數劫の修行に比すれば、一瞬間にも足らぬことに想到し、勇猛精進たゞ念誦につとめた。

瑜伽修習中感見せし好相や靈夢は空裡の幻華語るべきことではなからうか、多く感ぜし靈夢と好相につき、一つづゝ記することにする。開白して六日目即ち七月十七日の朝起床前、始めてある靈夢と思はれるものを感じて以來八月三十日の結願の朝まで、殆んど時刻を同じうして、毎朝一時二時頃の間に、靈夢と思はれるものを見た、その間によく見たのは星の夢であつた。八月二十八日の朝の如きは、無數の星が滿天に輝き、その中央一大圓輪の碧空をなし、中に忽然として明月の現じたるが如きは、今に一念思ひ到るごとに、心面に明かに再現せられるのである。また好相と思はるゝものは七月二十二日の午前の座に於て初めて感じたが、もつとも驚異と感激に堪へなかつたことは、結願に近き八月二十五、六日頃より、念誦中、本尊殊に微妙の相好を現じ、光明を放ち全身に通徹し、言ふべからざる靈感を覺えたことであつた。八月三十日午後六時十分の日蝕に當り、正に一百萬遍の眞言の念誦終り、結願の作法をな

したが、結願の座には壇上に供じある蘇の涌きあがるを見た。かくて靈感靈想のうちに魔障なく結願するを得た。御寺の方より結願終らば、直に本坊の方へ出でよとの懇な御計らひであつたがどうも求聞持堂を去り難く、その夜は本尊の前に通夜して法樂を捧げたが、感涙滂沱として禁じ得ざるものがあつた。さうして本尊に對し如何にして報恩感謝の誠をささぐべきであらうか、報恩の道とて他に無かるべく、たゞ本尊の御心を體し、道の爲めに盡すことが、唯一の報恩なるべきを知り、本尊に深き誓約をなし、翌朝供養法を修し、午前十時頃本坊へ下り、五十二日目にて入浴なぞをなし、懇な供養をうけ、正午過ぎ下山せんとする頃より、天候にはかに變じ、雲雷風雨全山を震撼し來つたが、須臾にして霽れ上り、午後二時過ぎ島村師に伴はれ、幾度か靈峰を拜して下山し、歸路についた。

その年の十一月下旬、神戸の關西學院へ講演に行つたことがあつたが、先づ學院に近い布引山瀧寺に着いた。講演には同寺の住職であられる東山師も來聽せられてあつた。私の講演の內容は何んであつたか覺えて居らねど、見佛見神のことに說き及び、弘法大師が阿波の太龍寺や土佐の室生戸崎にて、求聞持を修し給うたとき、本尊妙相を現じ、明星來影せしことなぞも語つた。講演終つて瀧寺へ歸りしに、東山師は今朝寺內の者にて、星が天降つた夢を見たものがあつた、その日貴衲が來られ、求聞持法中明星來影の話を聞き、不思議に堪へないとて、大師御影の開眼供養を請はるゝがまゝに修し一夜法談にふけつたことがあつた、有漏雜染のうちに住む身なれば、時に妄雲心面に現じ來らんとすることあるとも、瑜伽修習中感見せし、本尊界會の靈感に一念思ひ至るとき、妄念自ら去り、心源の空寂に住し得らるゝを感謝しつゝあるものである。

眞言密敎に傳へたる諸尊法中で、虛空藏菩薩の求聞持法と、不動明王の八千枚の法とは最も大行であるが、眞言行者たるものは共に一度は修すべきであるとは、久しい以前より聞いて居たが、正しく八千枚の祕法を修したいと思うたのは、玄海法印の八千枚勤行日記を讀んでからであつた。玄海法印の記に

延慶四年二月一日起首して、同月二十一日まで二十一日間自坊にて、八千枚護摩法の加行を每日三時之を修し、同月二十一日黃昏より奧院に參籠し、その日より五穀を斷つて菜食し、二十八日の本尊不動明王の緣日に斷食して、正しく八千枚を修せり、酉の刻に行法を始め其夜寅の半程に結願す。正行第三日日中の時、目を閉ぢ觀念中、禮磬の右程に、法衣を着せる高僧（金剛智三藏の如き衣服を着し）來居せるを見、又燒八千枚の時六千三百枚燒き畢り、祕觀に住する處、壇上戌亥の角五色界の內に、明王の二童子影現せる奇瑞を見、法力賴みあるを知り、精誠を凝らす云々（取意）

八千枚を修したいとの發念は、此記を讀んでからであつたが、昨年それを修したのは、去歲一月十三日七十九歲にて逝いた、老母の菩提に回向せんが爲めであつた。卽ち昨年七月七日（陰曆六月一日）自坊にて、八千枚加行の開白をなしそれより二十一日間每日、後夜日中初夜の三時に護摩を修し、かくして二十一日の加行終り、七月二十七日（陰曆二十一日）午後より奧院へ參籠し、同日黃昏より奧院の大師寶前の燈籠堂にて正行を開始し、每日三座護摩を修し、八月三日（陰曆六月二十八日）に結願をした。その結願の時、八千枚の護摩供養をなしたのであるが、結願の座は、二十八日午前十一時に行法を開始し、翌日午前一時頃終つた。正行一週間は穀味を斷ち所謂菜食をなし、結願の前日より斷食であつたが結願の座は殆ど十三時間の久しきに亘りしも、身心輕安無事八千枚の供養を修し得た。八千枚の祕法は、不動明王の儀軌に說かれたるものにして、こゝにその祕義を述ぶることが出來ないが、先德の祕釋の中に

『八千枚とは八識相應の惑障を斷盡して、諸佛の體性を成ずる法門なり、衆生の妄心その無量なれども、廣を攝して略に從ふときは八識に過ぎず、八識各千殊の惑品あるが故に八千となる、千とは滿數を擧げ無數を表す。また曰く娑婆往來八千遍して成就する無上大菩提を、一生一時に體得する祕法なり云々』されば淨信を凝らし深き三昧に住して修行した。

八千枚の修行中にも、靈感があつたが、殊にありがたく體驗した一事は、結願の座の字輪觀の觀念中にその觀の正旨に住せられたことである。字輪觀は一座行法中の最祕の觀で、本尊と自心と融合し、一體不二の祕旨を體する觀法にして、數十年毎日の行法中には、必ず修する觀なるも、今まで此の觀の眞意を體することが出來なかつたが、八千枚の結願の座に於て、字輪觀に住するとき、不思議にも自心が本尊の心地に引き入れられ、自心と本尊と全く同一圓明の心境に住する深い體驗を得、心地朗然として開け、一切は自心の相にして、一切のうちに自心を見、自心と一切との融妙不二の不思議境を體することを得た。三昧を發得せるとて自ら己を高ふするではないが、字輪觀中不思議境を體せられたるを喜ぶものである。さきに求聞持法の修行中、本尊の威神力自身に加はり、本尊と自心と感應加持の妙境を得られ。八千枚の修行に依つて生佛一體の祕旨を體せられた。さうして古聖我れあざむかず、佛道はたゞ實修して體得すべきにあるを知つた。（昭和五年四月五日）

七　信仰の體制

御稜威を仰ぎ、一切を君國に捧げ、國家の總力を擧げて大戰の完遂に邁進しつゝある現下に、我等職域奉公の道、一再ならざるも、その思想信仰を整備し、國體觀念に徹し、健全なる思想信仰を以て、國民を指導錬成し、共に負荷の大任を果すことの緊要なるは、今更申すまでもないことであるが、こゝには眞言密教より觀たる佛教思想の體制の一端を語るであらう。

大師の十住心の判釋よりせば、現今我國の宗教を大途左の四種に分かち得らると思ふ。

一、超越神論卽ちクリスト教等。
一、空觀の解脫を明す禪的法門。
一、阿彌陀佛の本願を信ずる淨土門。
一、大日如來の果德を開顯する眞言密教。

主客一如の具體的實在をば、常人は主客物心の區別をなし、これを對立的に認識せんとするが如く、遍一切處の神的實在をば、自我を越えたる超越的實在として、信ぜんとするは、宗教的信仰に入る初門にして、クリスト教の如きは、その代表的宗教である。創造の神のみ眞實にして、所造の宇宙人生は非眞實なりとなす教へは、二見二邊を帶せるものにして、究竟眞實の教ならざること等は、十住心論等に釋せられたるが如くである。創造の神は愛の神ならざるべからず、しかるに此の世界は矛盾苦惱に滿ち、ことに自然的惡道德惡の存するより、超越的創造神の立し得ざることや、ことにクリスト教の說の如く人は皆原罪を有せる無價値無力なるものにして、たゞクリスト及び神を信ずることに依てのみ救はれ、天國に生する人はつひに神たることを得ざるとなすが如きは、かしこくも、我が現人神、乃至釋迦孔子等の偉大なる人格を拒否するものにして、眞實の教にあらざると共に、我が國體觀念と一致せざるものあ

り等は、今まで論じつくされたるところである。或はまた道德的拘束力を强大ならしめんとして、規範意識を神的人格たる超越的實在に根據を求めんとする哲學者あるも、規範が高まれば反規範も深まり、人間の本能的意欲や、自由意志は神をも否定せんとするものがあるのである。こゝに於て規範も價値も。反價値も兩つながらを否定し盡し、禪門に所謂金屑貴しといへども眼に入れば翳となり、神佛貴しといへども、これを執すれば、法の病なりとして、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、一切を殺し盡し、本來無一物の心性を透得する空三昧に住せずば、心性の安住を得ざるものがあるのである。

禪門によれば、二は一に由て有なり、一も亦守ること莫れ、二とはこれ眞妄、善惡、美醜、迷悟等の對立的の法である、一とは是れ自心である、眞妄、善惡等の二つ既に除くときは、自心の一にも住することなき解脫境に達する空三昧を明かすものである。般若心經に照見五蘊皆空一度一切苦厄一と說かれあるが、空三昧に住し人生の矛盾苦惱を離るゝ教旨は般若經の根本教意なると共に、一切經にひとしく說かれあるところである。我等は神を信じ佛を念じながらも、神や佛にも苦情を訴へたいやうな惱みがあるのである。能信の自心も、所信の神佛をも空じつくし、所謂信ずるものなくして信ずる無信の信に徹する空觀に住せずは斷じ切れない苦厄があるのである。舍利弗、目連は神を信じつゝもなほ眞の宗教的安心を得られず、つひに釋迦牟尼如來の空三昧の教旨に依り、眞解脫を得て、釋迦牟尼如來の弟子となれりと云ふが、この空三昧には甚深の義趣存し、三論、法相、天台、華嚴等の諸大乘もこの空三昧を明かす外ないものともいはれるのではあるが、この空三昧の理趣を端的に體驗する道を示すものは禪宗である。古來武士にして禪門に歸するものが多かつたが、これ空三昧のうちには、自己の一切を捨てゝ君國の爲に捧げつくす深趣の存すると共に、絕對の力用が、無我空觀のうちより發し來るものがあるかである。されば、空無我の教旨は大和魂を養ふ甘露味なり、また空無我の深旨より開顯せられたる華嚴の一に一切を攝しつくす事々無量の法門こそ、上御一人に一切を捧げ奉る日本精神の原理なり等の說をなすものあるを見るのである。

空三昧には種多の深旨存するも、宗教的にいへば、空觀に住するところに人生の一切の苦厄を離るゝと共に、假神假我の迷執を離れ、眞神眞佛に接せられるのである。大乘起信論に空三昧に住し、しかもその眞理趣を體し得ざるものは西方淨土の阿彌陀佛を信ずべきことを明かされてあるが、これには深き教旨の存することなれども、空三昧に住し、心裏の妄執を離るゝとき、明鏡の曇り除かるれば、自ら此の影をうつすが如く、空觀によつて心鏡の妄雲除かるゝとき、本地法身の影像たる報身の阿彌陀如來を、感見するに至るゆゑである。卽ち空三昧に住し無明妄執を斷ずると云ふも、空三昧に通徹して無明妄執を斷じつくすことの容易ならぬものあるより空三昧のうちに感見せし、報身の阿彌陀佛に歸命し、その救濟を仰がんとするに至る道程を明かされたるものである。淨土門にては、法性法身たる眞如の空理より、法藏菩薩が現はれて、廣大なる因行を修し、つひに成就せられたる廣大なる佛果は西方淨土の報身阿彌陀佛なることを明かし、その救濟を說くものである。

深山の澗水は岩をかみ、石にくだかれ、千曲萬折を經て、つひに海洋に歸するが如く、我等が神を求め、佛に歸し無限の眞理にあこがるゝ、至深至奧の要求は眞神眞佛にまで通徹せずば止まないものがあるのである。卽ち佛を客觀に見、主觀に見、つひに主客を絕せる絕對の本地法身にまで通達せねば止まないものがあるのである。大乘起信論には事識（六識）によつて應身を見、業識（第八識）によつて報身を見ることを示すと共に、その細分別の業識をも破

つて無分別の一念法身に契證することを釋し

和合の識相を破し、相續の心相を滅して法身顯現すと

釋述せられたるが、これ客觀的に見たる應身をも越え、主觀的に見たる報身をも越え、主客の念をも絶するとき、如來の眞身たる本地法身に契合せられることを示すものである。この本地法身の木誓三昧を開顯し、この法身大日如來を中心とせる佛敎を開說せるものは弘法大師の眞言密敎である。

大日如來の大覺體に具する絶對の威神力を、大日經には自在神力加持三昧として說かれあるのである。しかしてこの三昧力をば自證と化他、普遍と特殊の二門に分かちて明かさる。その自證の三昧たる普遍の加持力よりいへば、あたかも日輪が天に沖し、萬象を等しく照らすが如く、大日如來の自證大覺の大智大慈の光明は、平等に一切衆生の迷妄を照破し、一切衆生等しく、絶對の眞理の光明のうちに住するのであるが、日輪遍ねく地上を照らせども、もし窓を閉ざして暗室のうちに居るものは、その光を仰ぐによしなきが如く、我等は大日如來の大光明のうちに住しながら自ら小我執にとらはれ、無明の暗室のうちに、惱み悶えつゝあるのである。かゝる衆生を救はんが爲めに、大日如來の自在神力加持三昧より、無盡の特殊の加持身を示現し給ふのである。經には三無盡莊嚴藏を奮迅示現すと說かれあるのである。卽ち受用、變化、等流等の無量の諸尊を十方法界に現じ給ふのである。我等は直接無媒介に絶對の眞身たる大日如來の自證大覺の體に契合し難きものあるが故にこの特殊の加持身より本地法身に證入するのである。しかしてこの特殊の加持身は、大日如來の無限の大智大慈悲の寶藏を開いて、衆生各々相應の法門を示現し給ふものなるが故に、世間の矛盾苦惱の救濟を如來の威神力に依て度脫し給はんことを希願し、世間有相の悉地を求むる祈願の宗教となつたのである。しかも息災、增益、敬愛、調伏等の四種五種の法門は、何れも世間有相の悉地より出世間無相の悉地を成ぜしむるにあるより觀るも、敎の深意は、最初人間的意志に生んとして祈願をなし、つひに如來の御心のうちに生かさしめんとするにあるを知らるゝのである。また密敎の行法は特殊の加持身を念誦する法門なるも、その字輪觀に至れば、これ加持身の三昧に卽して普遍の大日如來の自證の大覺體に歸するものである。眞言密敎は無量の特殊の加持身を信奉するが故に、その信念に統一なきが如き觀あるも、何れの尊を念誦するにしても最後に字輪觀卽ち大日法身の三昧に歸するを知らば、特殊に卽して普遍の大日の三昧を體するにあるを知らるゝのである。しかして字輪觀に遮情と表德の二門あり、遮情よりいへば字門の不可得を觀して、阿字の大空位に住するにあるも、表德よりいへば月輪觀である。世間の月輪は日輪の光りをうけてその全貌を現はすが如く、一切衆生は三世常恒に法性の大日如來の大智の光明に照らされ、我等の本有の淨菩提心の月輪は、三世常恒に如何なるときも、照りかがやいてあるのである。我等は如何なるときも、大日如來の自證の光明に照らされ如來圓明の心鏡のうちにある眞趣を體するとき、眞の宗敎的安心を體せらるゝのである。心月輪のうちに加持身の種三尊を觀じ、その心月輪を宇宙法界に遍せしめ無心無念に住するに至るとき、本地大日に冥合し、本地加持不二一體の祕境を體するのである。しかしてもとの一肘量の心月輪に還歸するに至れば、これ一肘量の月輪にしてしかも有分限の月輪にあらず、法界の全我を體せる我である。特殊に卽して普遍を體せる妙體である。加持身を知れば本地身を知り、本地身を知れば自心を知る敎の本旨を思ふべきである。

佛敎には無量の法門あるも、空有、理智、寂照の二門に歸す、しかして空三昧のうちに月輪を觀するは、これ佛敎

の根本精神たる寂照不二の妙諦を端的に體得する妙門にして、また神佛不二の妙諦を得するの妙道である。即ち心月輪のうちに天神を觀じ、その心月輪を宇宙法界に遍滿せしむるに至るとき、神の無限性を發揮せられ、神神の威光宇宙法界に遍じ、神威を增輝し奉るのである。しかも、眞言密教の多法界の教旨よりいへば、特殊の當體を動せず、特殊の神性を守りつゝ同時に絶對普遍の神性を發揮せらるゝのである。三世常住金剛不壞の大日如來の三昧を以て天壤無窮の國體を守護し奉らんとする眞言密教の護國精神の深旨の一端を了すべきである。弘法大師の眞言密教は日本の國民性に適應せる日本的佛教なり等のこと、數紙のよく盡すところにあらざるも一言論及すれば、一般佛教は應身の釋迦如來、報身の阿彌陀如來は無神論的法身の上に現はれしものと說くも、眞言密教は佛教の根本觀念たる法身を有神論的に說き、法身をば三世常恒に生ける佛身なりとなすものである、即ち無神論的佛教を有神論的たらしめたるものである。また應身佛たる釋迦如來を越え報身の阿彌陀佛をも越え、究竟の佛身たる法身大日如來中心の教を開說せるものなること。或は一般佛教はこの國土は厭ふべき有爲の迷界と說けども、眞言密教は、金剛不壞の密嚴國土なりと說き、また一般佛教は人類は生死輪廻の迷子なりとなすも、眞言密教は大日如來の御子なり、金剛菩薩なりと說く、また一般佛教は現象は、眞如法性の正當なる開顯にあらずとし、この現象を非眞實として、無相眞如の空理に歸沒することを說くも、眞言密教は無相眞如の原底に六大一實の自然覺體の實在を明し、その自覺體を現證せる大日如來の大覺體の開顯が現境界なりと說くものである。また現象は六大一家の自然覺體の佛身なりと說くと共に、その自然覺體を現證せる大日如來を中心として佛身を開說するものである。また一般佛教は現象界たる俗諦界には神と人と、佛と衆生の存在を明すも、眞諦界中には神もなく人もなく佛もなく、衆生もなき深祕主義的教旨を宗致となすも密教は眞諦界中に神と人と佛と衆生の實在を明かし、永遠眞實の生を得て無限に生きる深意を開說するものである。或は一般佛教は空無相無願の三空三昧を明かし無祈願の教なるも、眞言密教は祈願の宗教なること、或は本因本果、五佛心王等の深意を示し、心王心所各々自性を守りて雜亂せざる義等は、これ國民性に相應の宗教なりと共に、國體相應の教である。我等は佛教の最極究竟の眞理趣を明かす眞言密教の教旨の宣布と共に、我が國體の本義を顯揚し、萬邦をして皇化を仰がしむることに盡瘁せざるべからざる使命を有するものなることを自覺せねばならぬ。

（昭和十八年一月）

昭和十八年十二月一日印刷
昭和十九年二月一日發行

〔七〇〇部〕　非賣品

著者兼發行者　和歌山縣伊都郡高野町高野山　金山穆韶

印刷者　京都市西洞院七條南（西京七）內外出版印刷株式會社　代表　宮崎勇治

（出版會承認號 ハ 11051）

不許複製

發行所　和歌山縣伊都郡高野町　高野山大學出版部　振替大阪八〇八二二番

958
145

19年 4月 21日

終